

人とエルフが共存する、豊穣にして神秘の地、マグリナ―。

この地は今、魔族の侵攻に晒されていた。
領土と奴隷を欲する彼らは、
多くの魔物を率いて街を蹂躪し、森を焼き払った。

そんな中、魔族の暴虐に抗わんと一人の若者が立ち上がる。
人とエルフの血を宿した宿命の勇者マルクは、
最愛の母に見送られ、今まさに旅立とうとしていた。

宿命の勇者
マルク

勇者の母・ハイエルフの賢者
マルシェラ



「いいですか、マルク。この地に魔族の脅威が迫っています。間もなくマグリナは、大きな戦火に包まれるでしょう。たくさんの人々が傷つき、血と悲しみの涙が大地を濡らすことになります。」

ですがそんな悲劇を食い止めるため、私は今日まで貴方を厳しく育ててきました。

行きなさい、マルク。

貴方は私と王国近衛騎士アノンの間に生まれた、エルフと人間の架け橋。約束の子。私達の自慢です。貴方が勇者となって、この地を魔族の暴虐から守るのです」



「はい、母さん！
父さんの技と、母さんの魔法で、
必ず魔族をやっつけてみせるよ！」

「どうか気を付けて。信じていますよ、マルク」

「うん、それじゃ行ってくるね」



「僕が勇者、か。」

正直どうして僕が……って思ったこともあった。

隠れ里の森ですつと修行の日々。

話し相手と言えば母さんと、それに森の動物くらい。

同年代の友達もできないで、

こんな辛いだけの役目なら投げ出してしまえばいいって。

でも、とうとうこの日が来たんだ。

魔軍の侵略が始まって、誰かが立ち上がらなければ、
この森も荒らされてしまうんだとしたら……!!

やっぱり僕、戦うよ。僕が生まれる前、
先代魔王との戦いで戦死したっていう父さんと、
そしてその遺志を継いだ母さんの分まで、
僕がマグリナを守ってみせる。

……僕が勇者になるんだ!」



マグリナの地を巡る冒険に旅立ったマルクは、
行く先々で魔族との戦いを繰り広げた。
当初は頼りないところもあったが、
幾多の死闘を潜り抜けることで成長し、
勇者としての才能を開花させていく。





そして魔王配下の四天王を一人、また一人と
退治していくにつれ、その名声は王国中に轟き、
人々の希望となっていた。

「てやあッ！ シャイン・スラーツシュ!!」

シュパアアアア——ッッ

「ぐはああああ——ッッ!？」



「おおつ、勇者殿が山のタイザンに
トドメの一撃を食らわせたぞ！」

「最凶と名高い魔王四天王を、これでもう3人も……！
この少年の力はやはり本物だ！
近衛騎士アノンと、

エルフの賢者マルシエラの間に生まれた御子……、
勇者殿が味方をしてくれれば、我らが王国は安泰というもの！」



「い、いえ、僕だけではとても……！
王国軍の皆さんが力を合わせてくれたおかげです」

「わはは、それは謙遜ですぞ。我らは後方を固めただけ。
すべては勇者殿の実力です。
最後の四天王討伐も、この調子で期待しておりますぞ」

「あの、それなんですけど……」

「むつ、何か問題でも？」

「はい、最後の四天王、空のレングバアは天空の覇者です。
今までの戦い方じゃ、技が届かなくて、決め手がない。
何とかしないと……」

「はあ、それは困りましたな。何か手段はあるのでしょうか？」

「あ、安心してください。
僕の母さん……賢者マルシエラなら、
空の敵と戦うための奥義を知っているはずですから」



王国軍と別れたマルクは、マルシエラに会うため、
久しぶりに森の隠れ里に向かった。

「ふう、王国軍の人、すごい剣幕だったな。
でもそれだけ僕に期待してるってことだね。
あの兵隊さんだけじゃない。
王国中の人々が僕を応援してくれているんだ。
その期待に応えないと——」



久し振りに故郷の家に帰りついたマルク。
だがそこには、見慣れない男の姿があった。

「なッ!? き、貴様は勇者マルク!
なぜここに……!?!」

「え……ここ、ボクの家ですけど。
貴方こそどうしてここに?
母さんの知り合いですか?」

「……ッ、そ、それは……!」



「じ、実はそうなんだ。私はジルという旅の傭兵でね。魔軍と戦っている最中に、マルシエラ殿と知り合って……。以来、彼女を護衛するために、この地に逗留しているんだよ」

「なんだ、そうだったんですね！
母さんを守ってくれてありがとうございます！」

「い、いや、私自身、
そうしたいと思ったことだからね」



「あッ、母さん！ ただいま！」

「お、お帰りなさい、マルク。頑張っているようね」

「うんッ、魔王の四天王を三人までやつつけたんだ。
山のタイザンは強敵だったけど、
王国軍の人達と協力してなんとか倒したよ！」

「ええ、風の噂で活躍は聞いています。母として誇りに思いますよ」

「ところで小僧……ごほんっ、マルク君はどうして里帰りを？」

「それなんですけど、実は最後の四天王との戦いに苦戦しそうで……」



「最後の四天王……空のレングバアのことだね？」

「はい、大空を自在に飛ぶレングバアを相手に、
今までの技は通じません。
だから母さんの知識を借りて、
空の敵に届く必殺技を編み出そうと思って」

「な、なるほど……」

「それで母さん、何かヒントないかな」



「そうね、かつての魔王との戦いで、あの人……お父さんは魔法剣を繰り出していたわ。あの時は私と二人がかりだったけど、魔力の素養があるマルクなら一人でもできるかも……」

「魔法剣！ それだ……！
詳しく教えてよ、母さんっ！」

「ま、まあまあ。帰って来たばかりで、そんなに慌てることはないんじゃないか？ それよりどうだ、久々にお母上の手料理を食べるのは？ なあ、マルシェラ。食事の支度が先だろう？」

「え、ええ、そうですね。じゃあマルク、魔法剣の話はまた後にしましょう」

「う、うん……二人がそう言うなら……」



そして翌朝、マルクは約束通り、マルシェラに魔法剣の奥義を伝授されていた。

「さあ今です！ 高めた魔力で剣を研ぎ澄まして！ 剣を体の一部とするように！」

「剣を体の一部………こうか！」

はあああ——っ！」



「やった、できたよ、母さん！」

「ええ、偉いですよ、マルク。ふふ……これで空の支配者、四天王レングバアとも戦えますね」

「うんっ、父さんの剣と母さんの魔法がひとつになったんだ。絶対に負けたりするもんか。ボク、四天王だけじゃなくて、魔王も倒して絶対に平和を取り戻してみせる！」

「ふふっ、その意気です。期待していますよ、マルク」



「あ、あのジルさん」

「ん？ なんだい、マルク君」

「えっと、僕が旅に出ている間、母さんのこと、よろしくお願いします。できるだけ早く魔王を倒して、戻ってきますから！」

「ああ、もちろんだよ。マルシエラ殿の身は私が守る。二人でよろしくやってるから、安心して戦っておいで」

「はいっ、お願いします！」



——そして魔法剣を会得したマルクは、再び旅立つ。

「さて、と。空のレングバアの根城は東の山脈か……。これ以上、街や村に被害が出る前に、ヤツをやっつけなきゃ！」

「……………」

（傭兵のジルさん、か。
母さん、ずいぶん打ち解けて、気を許してたな。
あんな風に微笑んでる母さん、初めて見たかも……。
ずっと二人で暮らしてきたのに、
僕がいない間、ジルさんみたいな男の人と
親しくなるなんて……。なんだろう、ちよつとモヤモヤする……）



「…………ッ」

（なんで僕、嫉妬してるんだ！
僕が旅の間、ジルさんみたいな大人の人が
母さんを守ってくれるんだ。いいことじゃないか！
そんなことより、魔軍との戦いに集中しないと！）



山間の廃城で、マルクは四天王レングバアと対峙した。

「行くぞっ、空を翔け、星の軌跡を刻め！」

魔法剣奥義、スターセイバー!!

「ぬおおッ、おのれ、勇者めッ、剣で空を引き裂くとは……ッ！
グギヤアアアアアア~~~~ッ!!?」

「……はあはあ、やったぞ。最後の四天王をやっつけた！」



「さすがですな、勇者殿。まさに一騎当千のお働きだ」

「あつ、王国軍の……！ 来てくれたんですね！」

「ええ、国王陛下のご命令で監視を……ああいえ、少しでも救援をと思いついてな、ハハハ！」

「見ての通りレングバアは倒しました。残るは魔王だけです！」

「そうですね。勇者殿なら必ずや王国に平和を取り戻してくれると信じていますぞ」

「はい、任せてください！ 血と悲しみの連鎖……僕が終わらせるんだ！」



「……行ったか。次が最後の決戦だと、張り切っておったな、あのガキ」

「聞きしに勝る恐ろしい力です。魔族などよりよほど怪物ですね」

「いつそ魔王と相打ちにでもなってくれば、後の憂いがないのだがな。」

「まあ、せいぜい頑張ってもらおう。適当に勇者とおだてて、ご機嫌を取ってやれば我らの代わりに戦ってくれるからな」

「ふっ、所詮はまだ少年ということですか」



王国の兵士達の身勝手な会話など、マルクには知る由もなかった。マルクの頭にあるのは、一日も早く平和を取り戻すことだけ……。そのために決戦の舞台、魔王城へと急行する。

だが、マルクが知らないのは、王国の利己的な思惑だけではなかった。宿敵である魔王ジルレティが、狡知にして邪悪な企みを進めていたことを――。そしてその残酷な結果を、マルクはこの後、突きつけられることになる。



「てやあッ、ブレイズスラッシュー！」

ザシユッ！

「はあああ、さすが魔王城だな。
ただの魔物がこんなに手強いなんて……
それに見たこともないタイプばかりだ」

「ククク……さもあるう。そいつらは我が最強のシモベが、
胎を痛めて産み落としたものだからな」

「その声……！ 魔王か！」



「よく来たな、勇者よ。ずいぶん苦戦したようではないか。そんなに消耗していて戦えるのか？」

「そんなこと……！」

お前を倒せば、平和はもうすぐ！
そのためにボクは、勇気と力を奮い起こすだけだ！」

「クク……果たしてそうかな？」

どうやら貴様は気付いていないようだな。
私の傍には、もう一人、我が腹心の魔女がいることを」

「なんだって、四天王はもう皆倒したはず……っ？」



「フフ、よく来たわね、待っていたのよ、勇者マルク。貴方がここに辿りつくその時を、魔王様と一緒に、首を長くして……♪」

（お、女の人……？ 底知れない魔力を感じる。でもこの声、聞いたことがあるような……？）

「だ、誰だ!? 魔王に味方するなら容赦しないぞ!」

「あらあ、私のことが分からないの？ くすっ、でも勇ましい声を出すようになったのね。旅立ちの時にはまだ頼りなさがあった貴方が……お母さん、感慨深いわ♪」

「——えっ？ お母さ……っ??」



「はあい、久しぶりね、マルク♪
元気にしていた？ フッフ、お母さんはとっても元気よ。
魔王様に眷族へと転生させていただいて、とても幸せなの♡」

「え……あつ、え……っ!？」

「あらあら、勇者ともあろう者が、
そんな風にぼかんと口を開けて、
油断してはなりませんよ」

「か、母さん？ お母さん、なの？」

「ええ、貴方の母マルシエラです。
貴方を勇者となるべく育てたハイエルフの賢者……、
けれど今はああ——♡」



「魔王様の忠実な参謀にして、調教済みの性処理ワイフ♡
どお、マルク。お母さんの生まれ変わった姿、
とおっても淫らで美しいでしょう？」

「あ……っ、ああっ、あああ……っ!?
ど、どうして……?
どうして母さんが……!？」

「ブン、動揺しているようだな、勇者よ」

「魔王ッ！ お前が母さんに何かしたのか!？」

「クク……まだ気付かんのか。貴様が以前、我と会っていたことに」

「なに？ あっ、そういえば……まさか、あの時……!!
家で母さんの傍にいた傭兵の男！ あれはお前だったのか!」



貴様が必死に戦っている間、この牝は倒すべき魔王に股を開き、ずっと腰を振っていたというわけだ！」

「あら、マルク。そんなオイタ、めつ、よ♪」

ぶるるっ がくう……っ

悪寒と共に全身の力が抜けていく脱力感に、勇者マルクはその場に釘付けになる。

「なんだ、急に力が……！」

「ふふふっ、貴方は気付いていなかったでしょうけど、私の呪毒を含んだミルクを、既に飲ませていたのよ。時間をかけて体内で根を張って、私の魔力を注ぐだけで動けなくなるように……♪」

「なッ!？」

「これで魔王様に逆らうなんて、バカな真似できなくなっただわね。ゆっくり教育し直してあげるわ、マルク」



「ど、どうして!? どうしてだよッ、母さん!」

「ククク……せつかくだ、小僧がよく理解できるよう、今の貴様の姿を見せつけてやったらどうだ?」

「ええ、魔王様がそう仰せなら……♡
ねえマルク、魔王城の魔物、手強いと言ってたわよね。
あの子達はね、お母さんが用意したものなの。
ほら、こんな風に——」



ウブな少年勇者にとつては、あまりに刺激が強すぎる、インモラルな光景が展開していた。母マルシェラの胎が、魔を孕んでみるみる膨らみ、禁呪による産卵を行う。その姿に、マルクは立ち尽くすことしかできない。

「はあつ、はあつ、はあつ、あはああ……っ♡」

「た、卵から魔物が……！
あ……ああ、あ……ッ」

そんなッ、あの姿は……！



「ククッ、気付いたようだな。貴様が道中、戦ってきた魔物は、マルシエラが産んだ眷族。言わば貴様の弟同然だということに……！」

「……ッ、違う！ 違う違うっ！」

「こんなヤツらがボクの弟であるもんか！ 見ている、絶対にお前を倒し、母さんを正気に戻してみせる！」

「フン、できるのか？ 今の貴様に……！」

「うるさいッ！ お前みたいな卑怯者に負けるもんか！ 必殺のスターセイバーを受けてみる！」

「ほう……、マルシエラから伝授された魔法剣の奥義か。だが忘れたか？ 貴様の体が呪毒に蝕まれていることを……！」



——がくん……っ

「あうっ、ち、力が抜けて……！」

「もう、ダメでしょう、マルク。
魔王様に危害を加えようとするだなんて」

「か、母さん……！」

「悪い子にはお仕置きしないとね。
さあ、子供たち、
マルクを死なない程度に痛みつけてやりなさい♪」

「や、やめて、母さんッ、やめ……！」

ビョルルルルル——ッッ！

「うわあああああああ~~~~ッッ!？」



「……あ……うう……」

——ドサッ

魔物の猛攻を浴びて、マルクは倒れた。
ボロボロになった息子を、魔女マルシエラは
嗜虐的な笑みで見下ろしている。

「くすっ、ご覧になりましたか。
勇者マルクは、この私……魔王様の忠実なる下僕、
魔女マルシエラが打ち倒しましたわ♪」

「クク……ああ、見ていた、見ていたとも。
憎き勇者、この小僧をついに……!!」



「あぁっ♪ 祝着にございます、魔王様。
ですがお楽しみはまだこれから。
マルクをじっくり教育し直して、
魔王様の忠実な眷族に変えてみせますれば」

「おおっ、そうであつたな。
母である貴様が、小僧にどのような調教を施すか、
お手並み拝見といこうか！」

「ええ、ええ……！ フフフ……ご期待くださいませ。
二度と勇者など名乗れないよう、
甘く甘く蕩かして、私と魔王様から
離れられなくしてみせますわ♥」



「起きなさい、マルク……」

「……う、うう……」

「起きて、マルク……いつまで寝ているの、さあ早く」

「……う、うあ……か、かあさん……?」

「愛してるわ、私のマルク、これからはずっと一緒よ」

「あ、ああ……かあさん……」



「……ッ、ん、ここは!？」

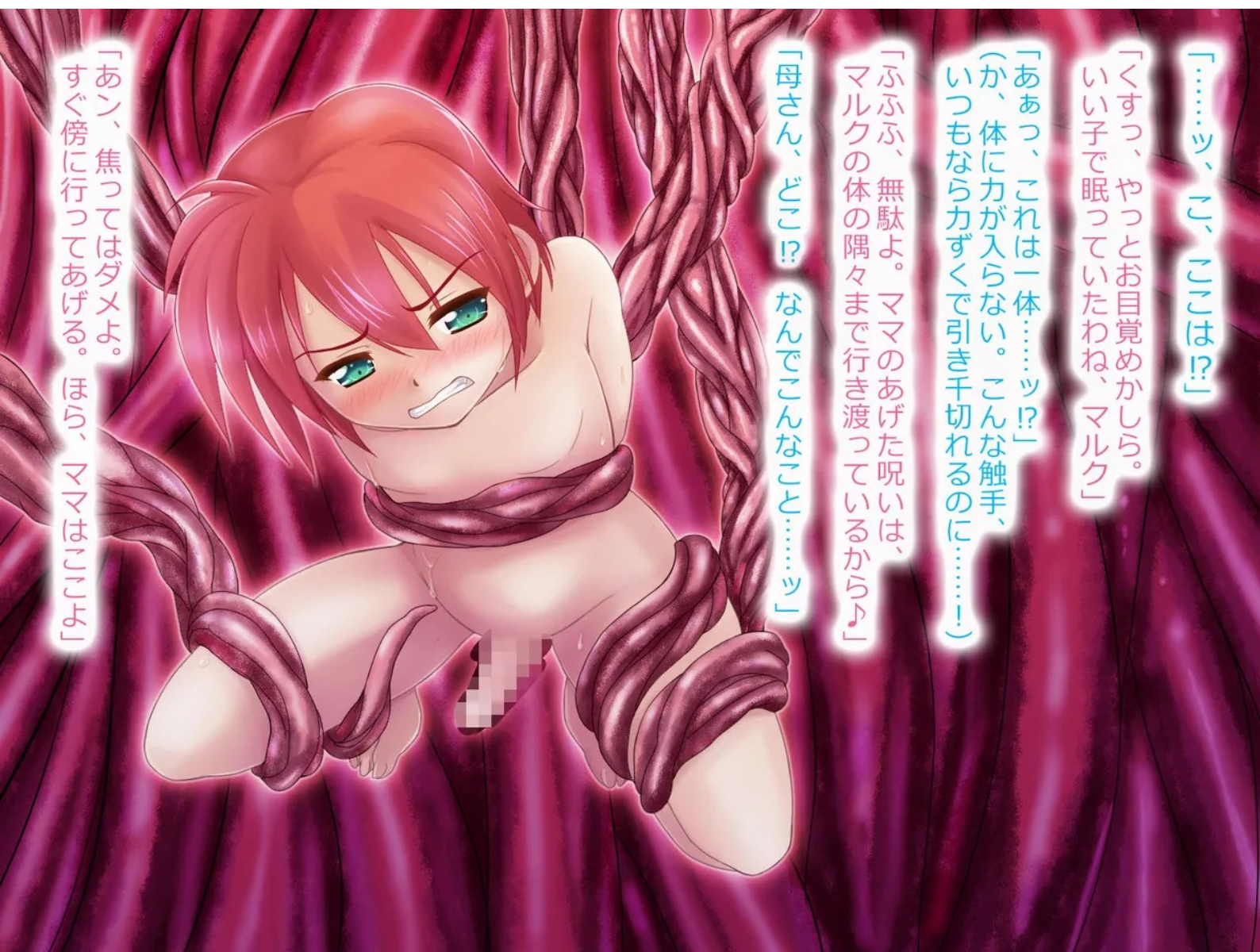
「くすつ、やっとお目覚めかしら。
いい子で眠っていたわね、マルク」

「ああッ、これは一体……ッ!?」
(か、体に力が入らない。こんな触手、
いつもなら力ずくで引き千切れるのに……!)

「ふふふ、無駄よ。ママのあげた呪いは、
マルクの体の隅々まで行き渡っているから♪」

「母さん、どこ!? なんでこんなこと……ッ」

「あー、焦ってはダメよ。
すぐ傍に行つてあげる。ほら、ママはここよ」



「母さんッ!」

「ええ、貴方の愛しのママよ。
そして今は、魔王様の忠実なるシモベ」

現れたマルシエラは、再び身重の状態になっていた。
本来なら母性の象徴であるはずの孕み腹が、
魔女の妖しさか、淫猥に映える。

「母さん、目を覚まして!!」

「フッフ、私は正気よ。貴方にもすぐ教えてあげる。
魔王様にお仕える悦びを♪」



——ずずずず……っ、おるるん——!!

「うっ、うあああ——っ!」

マルシエラの膣から触手が伸びた。
まるで生殖器のように勃起上がって、
マルクの菊門に宛がわれる。

「くすっ、怯えなくていいのよ。優しくしてあげる♥」

「な、何を言ってるの? 分からないよ、母さん!」

「いいから力を抜いて。」

ああっ、我が子の処女をいただくなんて、
身震いするほど、背徳的な瞬間だわ♥」

「やめてっ、母さん! うあッ、あぐぐぐうう——ッ!」



ずぶッ、ぐぐぐぐ——ズボオッ！

「イッ!? ぎいゝゝゝッ!?」

激しい衝撃がマルクのアナルを襲う。
触手が身をたわめて、無理やり腸内に侵入すると、
内側から膨らんで、ミリミリと菊門を拡げてくる！

「ああッ、これがマルクのおけつまんこね！
触手の仔を通して、私にもケツ穴の具合が伝わってくるわ！
ぎゅううって全力でしがみついてきて、
とってもいやらしいわよ！
貴方とへその緒で繋がっていた頃を思い出して、
ゾクゾクしてきちゃう♪」



「あつ、ああッ、そんな……！
母さんの産んだ触手が、僕のお尻に……！
こんなことって……ッ、うぐうッ、はあッ、あうッ……ッ！」

「フフ、苦しいの、マルク？
歯を食いしばって息む貴方もカワイイけれど、
安心して、すぐによくなるわ」

「なッ……そんなわけえ……ッ！」



「大丈夫♪ 私が触手を介して、
感覚を疑似体験しているように、
貴方にもおまんこの快感を
共有してあげるわ。ほら——♪」





きゅううん——♡

ヒクヒク
ヒクン——♡



ポウ、とマルシェラの淫紋に微かな光が灯った。
ホタルの光にも似たその明かりは、
触手を伝ってマルクの菊門に到達する。

「な、なにっ? 急に火照って……ジユクって……
ああっ、この感じ……!! ふあっ、ああっ、あああ——っ!」

トロロン、とマルクの表情が蕩ける。
初めての感覚に惑乱して、その腰から全身まで
ガクガクと震えだす。

「ほおおオオッ!? ふあああ——ッ!?」

マルクの状態を見透かしたように、触手が動きを早める。
拡張アナルが、まるで女性の膣のように粘液を垂らし、
しきりに息む括約筋は、触手を頼張っているかのよう。

「ふあああつ、なにこれ響くつ!」
「何かが膨らんでつ、ああつ、おかしいつ!」
「僕の体おかしいよつ! あんつ、はあつ、ああうう—っ!」

ずっ!

ずっ!

ずぼっ!

ずぼぼっ!

ずちゅっ!

ずちゅ——っ ♡



「あはあッ、感じてるのねマルク！
それがママの……女の快感よ！
心と体に刻み付けなさい！」
もっと感じてッ、

「あッあああ——っ!? や、やめてえ！ ああッ、何か来るッ！
熱いのッ、あはあああ——っ!?」

「んっふううんん♥ いいわよ、そのままメスイキなさい！
ああン、ママもイキそう！ 触手から精液ほとばしるわ！」

「ああッ、そんな……！ やだッ！ いやなのにこれ……ッ、
これが母さんの快感？ 僕、僕……ッ！」



あんっ あんっ、
あッ あッ、

はあッ、はあッ、はッ、

ふあッ、はあッ、

あッあッ♥

ああ——っ！

「あッはあああああ——っ!？」

触手の射精が始まった。
瞬く間にアナルを氾濫し、飛沫を撒き散らす!

「ああああ、流れ込んでくるよお……っ。
まるで……僕の体じゃないみたい……!!
ああっ、とろけちゃう……っ」

「ふふっ、偉いわ。ちゃんとメスイキできたようね。
その感覚、忘れないよう魂に刻み付けなさい!」

「い、いや……ああ……っ、ああっ、あああゝゝっっ♡♡」

ビュルッ!
ビュルッ!

ビュゝゝッ♡♡



「はあ……はあ……ああ……はふう……」

「あら、マルク……おけつまんこ中出しされて、
貴方もお射精しちゃったのね♪
触手と比べるとカワイイおちんぽ、
精液の量も比べるべくもないけど……♪」

「あふう……はあ、はあ、うう……見ない、でえ……っ」

「クスッ、トコロテン射精した気持ちはどうかしら？
普通の男の子はそんな風にイかないのにねえ。
……でも気にすることないわよ、これからマルクは
本当の意味で牡じゃなくなるんだから♪」

「う、くうう……そ、そんなの……ッ」



「……そんなのイヤだッ。僕はそんな風にはならない！
必ず母さんを正気に戻して、魔王を倒してみせるッ！」

「まあ……！ あらあら、悪い子ねえ、
ママの言うことを聞かないで……けれども、フフ！
分かっていたわ、貴方がこれしきで折れないこと。
さあマルク、その強気がどこまで続くか試してあげる！」

マルシエラの淫紋が再び光を放つ。
触手を介して伝わるその波動が、マルクの下腹部にパルスとなって送り込まれる。

「うッ、ぐ……ッ、何を……！」

ああ、これ……ッ!?

「くすっ、あらあ、ちんぽこ、また元気になったわね♪
じゃあそのカワイイ子、今度は私が味わってあげるわ♡」



「か、母さん……?」

触手と呪いに体の自由を奪われ、マルクは気付くとマルシエラに抱き締められていた。

股間の勃起が、柔らかな淫肉に当たっている。魅惑の感触に、性知識の乏しい少年勇者の肉茎が自然と反応してしまう。

「あつ、あああ、は、離して……だめっ!」

「あら、離していいのかしら? 男らしいところを見せるんでしょう? マルクがおまんこしてくれないならママ、魔王様のお相手をしにいくけど?」

「えッ、な……ッ!」



「ねえ、マルク。ママを取り返したいんじゃないかった？
それとも魔王様とおまんこセックス、
指を啜えて見ていることがお望みかしら？」

「い、イヤだ！ そんなのイヤだよ！」

「そう、イヤなの？
ふうん、だったらどうすればいいか、分かるわよねえ？」

マルシエラに挑発されるまま、
マルクは腕に力を籠める。
淫母の胸に顔を埋め、
匂いたつ甘いミルクのような
牝フェロモンに、
正常な判断力を鈍らせていく。

「ほおら、頑張つて。勇者なら私を魔王様から取り戻すのよ」

「うあつ、あつ、あああ……っ」



「はうう……っ、んはあ——」

温かな肉の泉に呑み込まれる感覚がして、
気付くと奥まで結合していた。
竿をついばまれるような蠢きに、無意識に腰が泳ぐ。

「ふああっ、なにこれ、なにこれええ♪」

「くすっ、いいわよ、マルク♪
そうやってちんぽでナ力を衝くの。
ママのナ力に、貴方の存在を刻み付けて？」

「はあっはあっ、あっあっ、熱い……ぬるぬるで……、
ああっ、すご、い……気持ちイイ……っ！」

キュン……♡

ぐちゅ にちやっ

ずっ ずっずっ

「ふふ……あらそう？」

でもママはちよつと物足りないかしら。
マルクのちっちゃな象さん、ママの子宮まで届かないしい——」

「そ、そんな……僕……っ、あ……ああつ、あ……っ」

「ふう、ねえマルク……ママ、
魔王様のデカマラおねだりしに行ってもいい？」

「……ッ、や、やだ！ やだ、やだあッ！」

淫母の胸に顔を埋めたまま、
マルクは駄々っ子のように首を振る。
腰の動きは衝動的に大きくなつて、
自らの意志でナ力を突き回す。

（行かないで！ 行かないで！）

「んっ、健気な子。ママも応援してるわ♡
ほら、おまんこをぎゅっつて」

んっ

んっ

ぎゅっぎゅっ♡

「……ッ、ああ——ッ!？」

「あああつ！ はうううつ！
あつ、あああ~~~~ッッ！」

「んっ、まあ……！ もうぴゅっぴゅっしちゃったの？
早いわねえ、まだママ、満足していないのに」

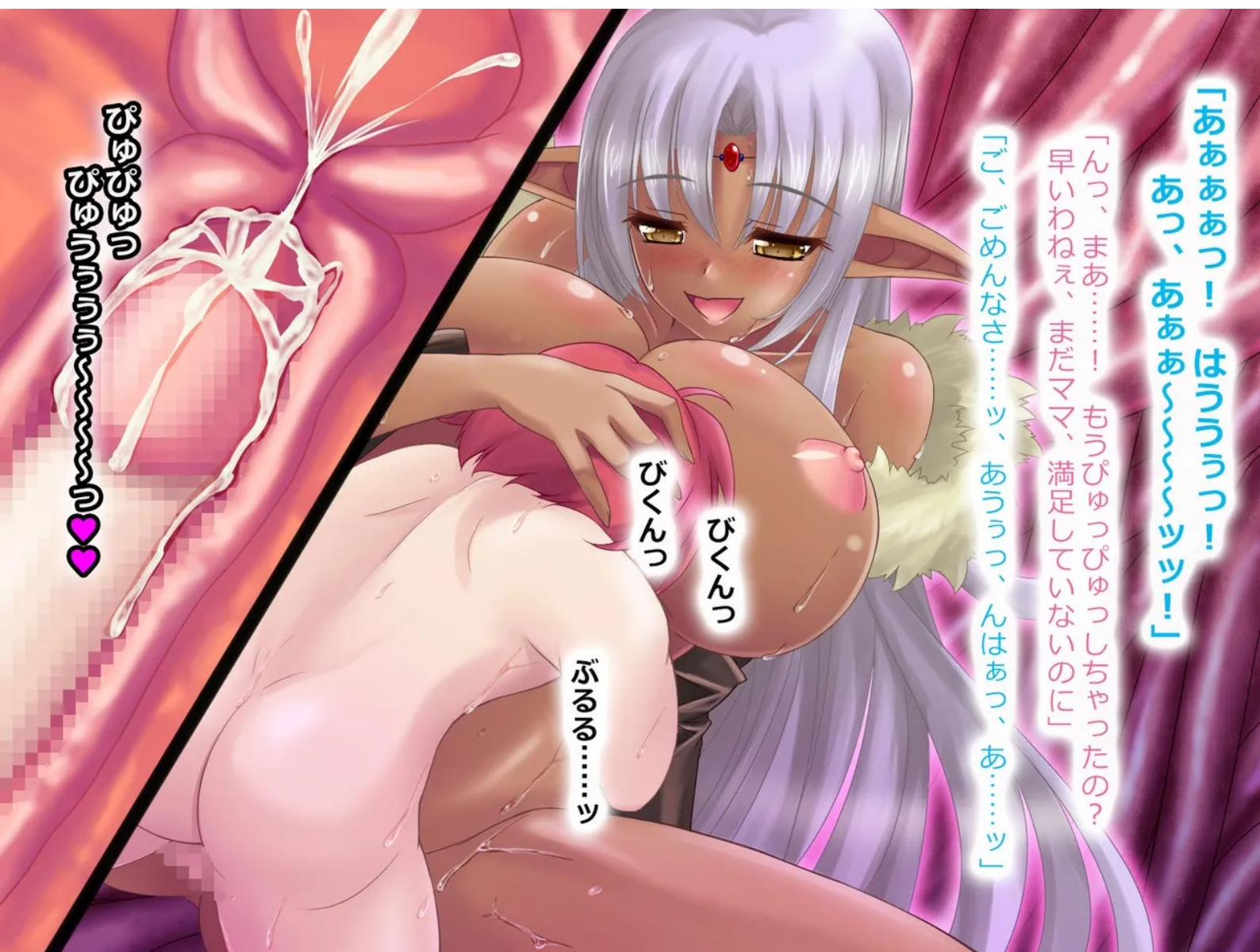
「ぐ、ぐめんなさ……ッ、あううつ、んはあつ、あ……ッ」

びゅっ

びゅっ

びゅん……ッ

びゅん~~~~ッ
びゅん~~~~ッ
♡♡



「はあはあ……あつ、あああ……っ、
い、行かないで、行っちゃヤダ……母さん……っ」

——ぎゅっ——

射精後の虚脱を経てなお、少年勇者は
淫母の温もりにすがりつく。

「——くすっ、ふふふふ、大丈夫よ、マルク。
ママ、どこにも行ったりしないわ」

「ああ……ほんとう？」

「ええ、ずっと一緒よ。
だから泣かないで……ふふ、よしよし——」

「ふあつ、あん……っ♪」

——ぞくぞく——

びくんっ びくんっ
びく……っ



「今まで苦勞を掛けたわね、マルク。
貴方を勇者になんか育てて、さぞ辛かったでしょう？
でも、もういいの。いいのよ。
これからは親子で魔王様にお仕えしましょうね♪」

慈愛に満ちた母の声が、耳朶に甘く響く。
あやすようにペニスを抱擁してくる、
膣ヒダの感触にもうっとりする。

気持ちよさのあまり、尿道に残っていた
精液がトロリと溢れだしてきた。
男らしさの欠片もないお漏らし射精。
けれど今のマルクには、それが堪らなく心地イイ。

トロオ〜っ ♡

「はあはあ、僕が魔王に……でも、それは——」



「ふふっ、勇者の使命
なんて忘れてしまいなさい。
ほら、こうして——♡」

「んっ、んん……っ」

「赤ん坊の時を
思い出すでしょう？
さあ、遠慮しないで」

「ぶああ……んっ、
ちゅっ……っ♪」

促されるまま、乳を吸う。
じわあっと口内に染み入るミルクの味に、
強張っていた心が蕩けていくようだ。
多幸感が満ちて、頭の中にモヤがかかっていく。

(……あ、ああ……僕、何をやって……？
どうしておっぱい飲んでるの？
おっぱい甘くて、あつたかくて……
ふああ……戦う気持ちが溶けてくよお……♡)



「ちゅうつ、
ちゅっちゅつ、
ちゅうつ……んくつ、
ちゅぷう……っ♡」

「フッフ、夢中でしゃぶって……カワイイ。
たんと飲みなさい。そして何もかも忘れて、空っぽになるの。
そうしたらママと同じように、
魔王様の眷族として転生させてあげましょうね」

「ちゅうつ、ちゅっちゅっちゅ……んぷらん——♡」
（……母さん、何を言ってるの？
だめ……考えがまとまらない。なんだか眠くなって……）

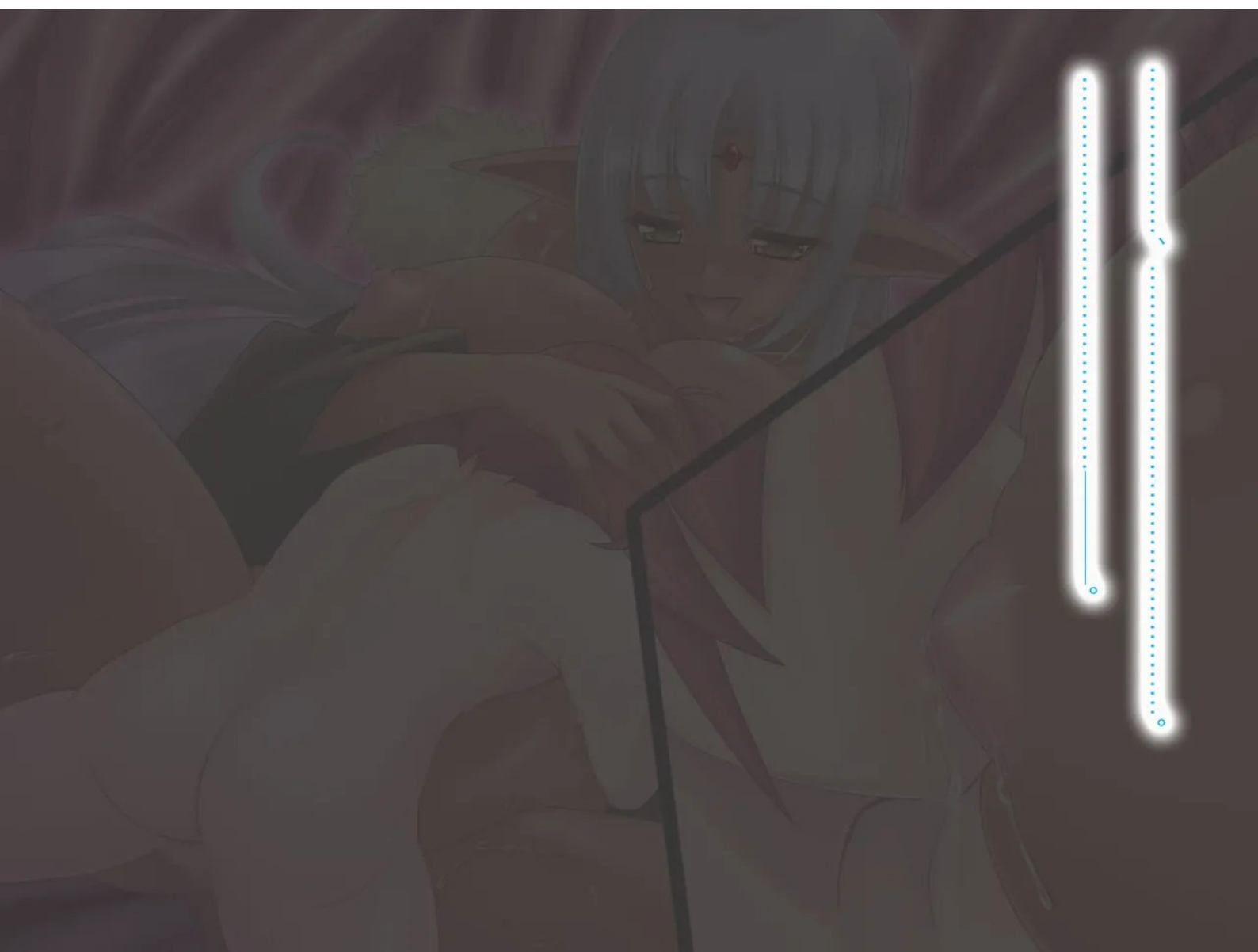


(……かあ、さん………僕、は………)

まるで胎内にいるかのように安らかな気持ち。
豊満な肢体にしがみついたまま、全体重をゆだねて――

――そしてマルクは、意識を手放す最後の瞬間まで、
マルシエラの乳首を吸い続けていた。





「——マルク、マルク……」

「……ん、……んう……ん……」

「マルク、マルクったら——」

「あ、れ……？ この声……？」

「マルク、
ぼけっとしないの！
修行中に居眠りはいけません！」

「わっ、母さん！
あ、あれ？ どうして姿が元に……？」

「……姿？ 寝ぼけて夢でも見てたのかしら？」

「そ、そうじゃなくて、えっと……あ、あれ？」

「しっかりなさい。今は魔法の伝授の最中でしょう？
今日教えるのは、呪いに対抗するための
アンチカースよ。難しい術だけど、頑張って
マスターしないとね」

「う、うん」
(そうだ、母さんは高名な賢者で、
死んだ父さんと一緒に、魔王軍とも戦ったことがあるって。
それで僕も、魔族の再侵攻に備えて、
母さんから戦う術を学んでいるんだ)



「だけど……」

「どうしたの？
術式構築のやり方は教えたでしょう？」

「複雑すぎるよ。」

「頭の中で式を組み立てられない」

「いい、マルク。術式は考えるものではないの。
術理を理解すれば、自然と組み上がっていくものなのよ」

「う……理屈は分かるけど、なおさら無理だよ。
呪いなんて、かからないよう注意してれば大丈夫だしさ」

「マルクっ。そんな甘い考えではいけません！
暗黒の術者は、私達の想像もできない
悪辣な手段を使ってくる……あッ、マルク！」

「ごめん、母さん！ 僕、剣の稽古してくるね！」

「あぁっ、戻ってきなさい、マルク！ マルク——ッ！」



「……………っ、う……うん……っ」

「あら、起きてしまったの。眠っていてもよかったのに」

「か、母さん……ふああ……っ」

半勃起のまま、膣に包まれたペニスが疼く。
うっとりするほどの心地よさに、
思わず腰から力が抜けてしまいそうになる。

「……だ、めだ」

「マルク……？」

「母さん、必ず元に戻してみせる。
だからそれまで待ってて。」

「……母さんから教わったアンチカースで、
呪いを中和できれば——」

「……ッ、なにを……!？」



ドッゴオオオオオ——ツ!!

「何事だ!? 今の爆発はッ!?」

「も、申し訳ありません! マルクに逃げられました!」

「逃げただと? 勇者の小僧は、
貴様が呪縛していたはずではないのか?」

「それが、アンチカーズの魔法を使ったようで……。
油断していました……ッ」

「貴様が手引きしたのではあるまいな?」

「滅相もございません!
あの子を堕とし、献上することを、
心より楽しみにしていましたのに」

「ちっ……魂まで染め堕とした貴様が、
今さら翻意するとは思っていないが……」



「すぐに追手を差し向けましょう。
人間の王国軍も、私の眷族で討ち払ってみせますわ」

「できるのだろうな？
勇者の小僧に呪いを解かれたのだろう？」

「あの子に仕掛けた呪いは、それだけではありませんわ。
私とのまぐわいで、また別の、もっと甘美な呪いを
すでに仕込んであります」

「小僧がどんなにあがこうが、
母である貴様の掌の上というわけか」

「お任せください。既に種は蒔きました。
あとは芽吹いた呪いが、
あの子の魂を絡めとるのを待つばかりですわ」



辛くも脱出したマルクは、王国軍と合流していた。

「これは勇者殿。魔王城に攻め入ったと聞きましたが、魔王は討伐できたのですかな？」

「いえ、それが……」

「なんと？ 勇者ともあろう者が、決戦前に引き返してきたと？」

「す、すみません……」

「弱りましたな。」

我らは皆、勇者殿だけが頼りなのです。準備を整えたら、またすぐに出撃してくれるのでしょうか？」

「は、はい……」



(でも今のままじゃ、また母さんと戦うハメになる。
何とかして、母さんを元に戻す方法を探さないと……)

「……ふうっ、う……ンン……っ」

(……なんだろう？ 体が火照って、熱っぽい。
それに眠気が……ずっと戦いつばなしたから
疲れが出たのかな？
……でも、いま休むわけ、には……、
……)



眠りに堕ちたマルクは夢を見る。
まだ記憶に新しい、魔王城での悪夢――。

「くすつ、怯えなくていいのよ。
マルクが魔王様の牝に生まれ変われるよう、
私と同じ快樂を与えてあげる♪」

おぞましい墮落の誘い。
優しくも妖しい囁きと共に、未知の快樂が送り込まれる。

「ふあああつ、あああ、熱い……
体の奥から何かが膨らんで……あああつ♡」



淫母と体を重ねる、あまりに甘美な記憶がマルクの精神を侵す。

「大丈夫。ママ、どこにも行ったりしないわ。
だからこのまま、白いおしっこ、
好きなだけぴゅっぴゅして、
勇者の務めなんか忘れてしまいなさい」

「ああ……母さあん……」

柔らかな女体は、底なし沼のよう。
どこまでも沈んで、蕩けてしまいそう……。
このまま心を解放できたら、どんなに心地いいだろう。
夢の中のマルクは、母に甘え、
すぐるように両腕でしがみつき、そして――



「……ッ、はっ!？」

マルクは飛び起き、荒い息をつく。

「はあはあ……くっ、なんて夢を。
母さんを助けなきゃいけないのに、こんなことじゃ……!」





「あッ、ここにおりましたか、勇者殿！」

「へ、兵隊さん？　どうかしたんですか？」

「それが魔王の軍勢がまた侵攻を……！！
どうか助太刀くだされ！」

「わ、分かりましたっ、すぐに行きます！」

戦場では、異形の魔物が兵士たちを襲っていた。

(あれは母さんが産んでいたのと同じ……？
まさか母さんが近くに？)

「どいてください！ 僕が戦います！」

ズブシュッ！

ザシュッ！

ズババババ——ッ！

マルクは戦いに割って入ると、魔物たちを次々屠っていく。



「フッフ、さすがね、マルク。
魔王様の新たな精鋭を、いとも簡単に片づけてしまうなんて」

「母さん、やっぱり！」

「母、ですと？」
「勇者殿の母君と言えば、
エルフ族の賢者マルシエラのはずだが……」

「母さん、魔物を増やして、王国軍を襲うなんて……！」



「あら？ その魔物たちは私の子ではないわよ。
呪法によって触手同士で繁殖させたの」

「え……？」

「だってこのお腹には今、大事な種が宿っているものね」

「な、何を……？」

「ふふっ、今日はほんの挨拶代わり。
けれど貴方がグズグズしているようなら、
王国中に魔物を放つわよ。
それが嫌なら、早く私と魔王様の下に戻っていらっしやい」

「あッ、母さん、待って！」



「くっ、行っちゃった。
王国中に魔物を放つなんて……。
そんなこと母さんにさせちゃいけない。
戦うしかないのか……！」

「——こんな時どうすれば……
……父さん……父さん、なら……？」

無意識に、剣の柄に触れる。
王国最強の騎士だった父が遺した名剣——、
母を救い、王国を守るためにどうすればいいのか、
祈るように心に念じる。

「——そうだ、もしかしたら……」



「……勇者殿、勇者殿！」

「え？ あつ、皆さん、ご無事でしたか？」

「無事も何も大損害ですぞ。
さっきの魔女……あれが勇者殿の母、
マルシエラ殿というのはまことですか？」

「そ、それは……」

「事実なら由々しきことですぞ。
賢者マルシエラが魔王の手先になるとは……！」



「分かっています。だから僕は、母さんを元に戻そうと……」

「元に戻す？ 何を悠長な……！
あの魔女は我らを攻撃してきたのですぞ！」

「分かっています、でも……っ」

「はっ！ まさか！」

「な、なんですか？」

「相手が母親ゆえ、
手心を加えておるのではありますまいな？」

「そういえば、魔王城に乗り込みながら、
手ぶらで帰ってきたのも、もしや……！」

「ち、違います！ 僕は母さんも王国も救う方法を見つけただけなんだ！」



マルクの訴えも虚しく、
王国軍の者達の理解は得られなかった。
彼らはマルシェラを仇敵として、
今度は全力でやり合うだろう。

そうなる前に、魔王と決着をつけ、
マルシェラを元の優しい母に戻さねばならない。
マルクの孤独な戦いが始まろうとしていた。

（――勝算がないわけじゃない。あの技が完成すれば……!!
父さん、どうか僕を見守っていてください）



一週間後――。

「フン、勇者の小僧、性懲りもなくやってきたな。まだ我に歯向かうか。それとも跪くつもりになったか？」

「誰が……！ 母さんを助けて、王国に平和を取り戻す！ 僕はそのためにここに来たんだ！」

「私を助ける？ くすっ、おかしいことを言うのね。いま私はとっても幸せなのに、どうして助けてもらう必要があるのかしら？」

「母さん……大丈夫、すぐに元に戻してあげるから」



「むっ、来るか！」

「僕の魔力、そのすべてを注ぎ込む……！
行くぞ、魔王！
魔法剣奥義ッ、スターセイバー！」

シュパアアア——ッ



「ほう、我に狙いを絞り、速攻で決める気か。
溢れんばかりの魔力を籠めた
流星の如き太刀筋……
確かに見事、だが——！」

「そうはさせないわよ、マルク！」

「……ッ、母さん！」

「貴様の狙いなどお見通しだ！
我を倒せば、呪いが弱まると考えての浅知恵だろう！
だが今や、貴様の母は私の忠実な眷族！
身を挺して我を庇うことに何の躊躇いもない……！」

「く……っ！」



「動きが鈍ったな。貴様に母親を斬る決断はできまい。それが勇者の限界……」
「さあ、マルシエラよ、この隙に小僧を……！」

「お待ちください、魔王様！ マルクの様子が……！」
「む……ッ!?」

「……魔王ジルレティ、僕だってお前の卑劣さはお見通しだ。だから僕は、最初から母さんに振るうために魔法剣の術式を準備していたんだ」

「な、なんだと？ 貴様、まさか実の母を……ッ！」

「解呪の魔法アンチカースを剣に籠める！魔法剣カースバスター！これが特訓の成果！母さんを取り戻すための僕の切り札……！」





「やああああ——ッ!!」

「マ、マルクッ、きやああああ~~~~ッ!?!」



パアアアア

——光がやんだ時、そこには一瞬前と変わらない様子のマルクとマルシエラが立っていた。

「マルシエラは無事……斬られたはずだが傷はない。肉体ではなく呪いを断つ魔法剣とはな。この短期間でそんな技を編み出すとは、恐ろしいガキだ……！」

「……ええ、ですが心配いりませんわ。私はこの通り、魔王様の忠実なるシモベのまま。惜しかったわね、マルク」

「……っ、なんで……？」



「クスクス……知りたいかしら？
貴方の魔法剣がどうして不発に終わったのか？
まあ例え決まったとしても、
私と魔王様の絆を
断ち斬れるなんて
思えないけれど♪」

「カースバスターは、む、無効化されたの……？」

「そうね……そしてそうしたのは貴方自身」

「えっ？」

「正確には……お腹に宿る貴方の分身にね♪
ふふふっ、あの時、貴方に注いでもらった子種は、
私の魔子宮で大切に育てているの。
我が子の精で孕む……なんて背徳的なかしら♡
あれからずっと興奮して、ゾクゾクしっぱなしだったわ！」



「ぼ、僕の子……か、母さんのお腹に？」

「正しくは禁術の触媒としての分身ね。

貴方は自分にかかった呪いを、解いたつもりだったけど、その時にはもう新たな呪いが始まっていたの。そして呪いを通して、私と貴方の魂は繋がっていた。だから魔法剣をキャンセルできたの♪」

「そんな……ッ、そんなことって……！」

「残念だったな。我が眷族となったマルシエラの胎は、魔物を孕み、呪法を編む触媒となっている。我が暗黒術とハイエルフの知識が合わさり、禁術を成すほどの魔子宮になあ……！」





「ま、魔王……！」

「バカめ、隙だらけだ、小僧——！」

ギユオオオオオオオオ—— ツ!!

「うぐあああああああ~~~~ツ!!」

——魔王の黒い雷が、マルクを貫いた。
ボロ雑巾のように倒れた少年勇者の体から、
肉の焦げた臭いと煙が立ち昇る。

「虫の息だな。我が直撃を浴びて、
即死しただけ大したものだが……。
マルシエラよ、これでよいのだな？」

「ええ、さすがですわ、魔王様。
これで転生のお膳立ては整いました。
ふふっ、この子の魂を、私の子宮に還し、
快樂の中で蕩かしてあげます」



そして――。

次に気付いた時、マルクは奇妙な空間にいた。

心地よいぬくもりと、優しい暗闇で満たされた不思議な場所――。

体を伸ばせないほど狭く、窮屈で、それでいてその姿勢がなぜか自然に思える。

「……う、ううん……いじ、は……っ」



「はッ!？」

「目が覚めたかしら、マルク。
いいえ、正しくは魂が定着した、と表すべきね」

「その声、母さん……?」

「貴方の元の体は、瀕死の傷を負った。
だから魂だけを取り出して、胎児に宿してあげたの。
禁術によって霊的な繋がりがあったから、
難しいことではなかったわ」



「な、何言ってるの？　ここはど……」

「フフ……怯えなくてもいいのよ。
ただ心を委ねてくれればいいの」

「でも、僕はこうしてるわけには……ッ」

「まあ♪　なんていじらしい。
そんなになっても、まだ戦うつもりでいるのね」

「そ、そんなの……あ、当たり前……っ」



(……あれ、どうしてだろう、心が落ち着く。
ささくれていた気持ちがほぐれて、
楽になっていくような……?)

「ふふ……貴方のとまどいが伝わってくるわ。
大丈夫、大丈夫よ。そこには貴方を害する敵はいない。
勇者の役目や、戦いを強いたりする者もないわ」

「……う、ああ……っ」

暗がりの中、手足を折り曲げたごく狭い空間――。
それなのに心がとても安らか。
母の囁き声が心地よく響き、抵抗の意志を蕩かしていく。



ぐちゅ……ッ

「ん、はあ……っ？」

気付くと、おへそに触手が繋がっていた。
ドクンドクンと息づき、何かが、じわあつと流れ込んでくる。
経験したことのない、初めての感覚。
それなのにどうしてか知っている気がする。

それはまるで、餌をもらうひな鳥のような――。
幼子が、母に口移しで粥を食べさせてもらうような――。

「フフ……へその緒から伝わる波動は
気持ちいいでしょう？
貴方の魂を魔に染め上げるために、
私の魔力をたっぷり注いであげるわ♪」



「へその緒……？」
僕……本当に母さんのお腹にいるの？」

「ええ、そうよ。私の魔子宮の中で、貴方は生まれ変わるの。
それはとっても素晴らしいことなのよ」

「ふあ……ああつ、あ……っ♡」

トクン

トクン——♡

極上の酒に酔ったような……
雲の上にいるかのような恍惚を覚える。
それは女性の感じるオーガズムを何倍にも
大きくして、全身に広がる心地。

トクントクン、と心音が聞こえる。
それと一緒にへその緒が息づく度、
マルク——自分がマルクだと思っている胎児は、
ゾクゾクとした悦びを覚えた。

「んふう……ああ、ん……はあ、あ……♪」

「フフっ、へその緒を通して、淫紋の定着したのが伝わってきたわ。とつてもいい心地でしょう？
すごく、すごくおーく気持ちいいのに、
なんだか眠くって、トロロンとした感じ……♡
いいのよ、そのまま目を閉じてしまっても。
勇者の使命も戦いも、何もかも忘れて楽になりなさい」

「……ああ、ぼ、ぼく、は……」

じいんとした多幸感の中で、意識が拡散していく。
体を丸めて、睡魔に委ねてしまいたい抗いがたい誘惑――。



ぞくっ ぶるる……っ

「ふうう……っ、んっ、はああ……っ！」

下腹部に熱を感じ、マルクは震えを走らせた。
はじめはお漏らしと錯覚する。心地よさのあまり、
つい失禁してしまったのではないかと。

だがゾワゾワと生じる快感は、射精のそれにも似ていた。
へその緒から感じる波動と息を合わせるように、
ヒクヒクという痙攣がうつとりするほど気持ちいい。

キュン

キュン——♡

「クスクス……いいえ、お漏らしでも射精でもないわよ。
だって今の貴方に、おちんちんの機能はないもの。
それはね、牝が愛する人の精を受け入れる時の感覚……
牡に屈服して、自分の大事なところを明け渡す感じ——」

「め、牝……僕が……？」

「そうよ、貴方は女に、牝になるの。
今、おちんちんの場所に感じている疼きは、
女の子のおまんこが形作られているからなの♪」

「そんな……おまんこ……なんて……ああ……っ」

「んふうっ、受け入れなさい……っ。
牝になって、征服してもらえる悦びを……あああっ♡
そのために貴方は……あっあっ、生まれ変わるの！
魔王様に跪いて、永遠の忠誠を……っ！
おお……ンオオ——ツ♡♡」

ぴゅ……っ♡

ひゅっ
ひゅっ



胎内に響く、淫母の声の調子が変わっていた。
より陶醉して、喘ぎながら主への想いを謳う。
静かだった胎内が荒々しく振動し、
下の方から何かがせり上がってくる圧が伝わる。

「あぁっ、あんっ、わ、分かるかしら？
今、ママの膣内を魔王様のデカマラが
犯してくださっているの！
マルクのいる子宮の傍まで、どちゅんどちゅんって
突き回してくれているのよぉ——っ♡♡」

「か、母さん……そんなっ、僕、僕がいるのに……！」

子宮を侵犯する異物に、マルクは怯えた。
自分だけの居場所を侵されることに、
どうしようもない忌避感を感じる。
だが次の瞬間——。



「ふあつ、ふあああ——っ♡♡」

(これ、今、母さんが感じてる快感……っ。
女の人の……おまんこでおちんぼ受け入れる時の感じ……っ！
めちゃくちゃにされて、それでも媚びちやう時の……っ♡)

分かる。分かってしまう。

へその緒と淫紋を通して伝わる牝の快楽を、
作られつつある女性器がヒクヒクと再現している。
淫母の膣の具合までトレースして、
マルクを牝の快楽で翻弄する。そして——！

くちゅくちゅッ

きゅん——っ
きゅううん♡



どくっ、どくっ——！

ドブブブブブブブ~~~~~ッッ！！

(あッ、あああああ~~~~~

っ!?)

白濁の奔流が、マルクの心身を呑み込み、染め上げる。
征服される悦びの中で、淫母の言葉を理解してしまう。

(……あ、れ……ぼく、は……?)
母さん……、ママ……?)

それはさながら羊水。
マルクはその熱さの中で、記憶と意識を
まるで前世のもののように曖昧にしていく。

(あはあ……気持ち、イイ……♡
気持ちイイよお……ママあ、ママあ……っ♡
ま、ま……魔王さまあ……っ)

「あんっ、いまお腹を蹴りましたわ♪」

「クク、そうか。それにしても魔子宮の中で、子の魂を反転させるとは、面白い術を考え出したものだ」

「発育は順調ですわ。この分ならもうすぐ……
フフ、今度は魔王様に喜んでいただけるよう、
とつても素敵なカラダに産み直してみせます♪」

「ふっ、楽しみにしていよう」



——そして、しばらくの時間が経った。
魔子宮に封じられたマルクに、変化の時が訪れていた。



「はあ、はあ、はあ……ああ……っ♡」

マルクの身体は丸みを帯び、ふたつの乳房に女性器を持ったオンナのものと変わっている。もちろん胎内で、このままの姿をしているかというところではない。
マルクの魂が、自分をこのように認識するよう変質しつつあるということだ。

びゅんっ

ぞくぞく——っ♡

「ふふふ、とっても素敵になったわね。それがマルクの考える牝のからだ。魔王様に捧げたい姿ということかしら♪」



「はうう……ぼ、僕は……」

「あら、女の子は僕なんて言わないわよ。せつかくだから少し練習しましょうか。自分のことは私、お母さんのことはママと呼んでくださいね」

「あう……マ、ママ？ 僕……」

「私、でしょう。言葉遣いも女の子らしくしましょう。その方が魔王様も喜ぶわ」

「ああ……っ、ママ、怖いよ……っ。私が変わってく、変えられていくの……っ」

「大丈夫、怖がらなくていいわ。それは素晴らしいことなの。さっ、女の子レッスン続けていくわよ」



「んっ、はああ——っ!」

「ふふっ、魔子宮の幼蟲に、手伝ってもらうことにしたわ。ほおら、できたておまんこに触手が挿入ってるわよ。生まれる前に処女を散らす気分はどう?」

グチュチュ——ッ!

「あああつ、ナカで熱いおちんぽ暴れてるッ。奥まできて……ッ、乱暴にされると、お腹の奥が熱くなつてきちゃうのおーっ!」

「子宮、よ。貴方のナカにもママと同じ子宮があるの。クスクスっ、いいわぁ♪ おまんこでちゃんとおちんぽ締め付けて、とってもいい子♪ ママも昂ぶってきちゃう……ああ……っ♡」

「ふああっ、ママっ、ママっ！
おまんこすごいっ、おまんこ熱いー！」

「ああんっ、そうよお……おまんこイイの。
強い牡におまんこされるのが、牝の悦びよ！
フフ……分かるかしら、今ママもまた……
あんっ、んふううっ、ああ……っ♡♡
魔王様のおちんぽ頂いてえ……っ♡♡
ああっ、貴方を孕んだボテ腹、弾ませているのぉ——っ！」

魔子宮に力強い胎動が起きる。
空間がたわみ、丸めた肢体を持ち上げられるような衝撃に、
全身がゾクゾクするような強い興奮と悦びを感じる。

「はああっ、これ、今ママが感じてる幸せ……牝の悦び……っ！
あああっ、溶けあってくいよお。こんなの……だめえ、
私も牝だって分かれられちゃうっ。
こんな快楽をくれる相手に、勝てるわけないって
思い知らされちゃう……っ！」

ズボッ
ズボッ
ズボッ
ぬちゅっ

ずちゅっ
にちゅっ
ずぶう——！



「あっあっあっあゝっ！
イクっ、イクわよ！」

「おまんこキュっして！
おちんぽに気持ちよくお射精していただくの！」

「んはああっ、おまんこキュっして……
射精、ナ力で……ふあああっ、あんっ、あっあっあ……っっ」

「ぞくぞく……っ
がく——っ」

「ふん……っ♡」

「あはあはあはあゝっ！
「あああゝん……っ！？」



胎の内と外で、母娘が同時絶頂する。
子宮に流れ込む熱い精子――。
牝の力ラダが悦びのあまり痙攣を始める。



びゅくん……っ
 びゅ——っ♡

「ふあつ？ あつ、ああああ——つ!!」


~~~~~ツツ♡♡♡

押し寄せた濁流が、あっという間に魔子宮を満たす。  
心の中まで漂白されていくような白濁の氾濫。

そしてその時、マルクの思考には――

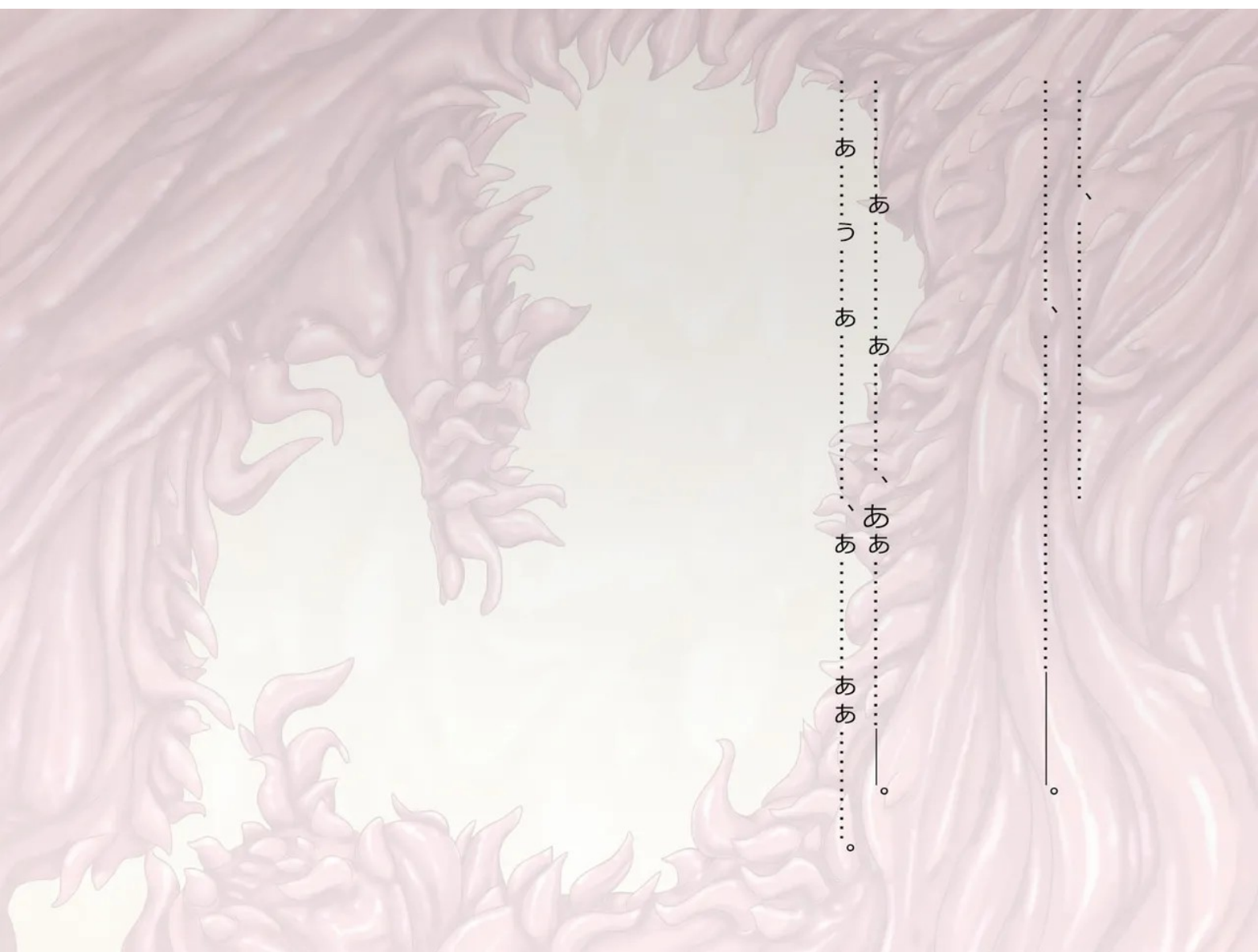
(……ツツ、あああつ、魔王さま、魔王さま、  
魔王さまあーん——♡♡)

ただただ魔王への媚びと、感謝だけがあった。











.....おぎやああ.....

.....おぎやああ——.....

.....おぎやああ——.....



「……マル……」

「……ルカ……」

(……んう、ううん……)



「……マルカ……起きなさい、マルカ……」

「……ま、る、か……」



「目覚めたばかりで、まだ頭がボーっとしているかしら？  
前の体を触媒に急成長させたから、  
まだ借り物みたいに、頼りない感覚かもしれないわね。  
でもすぐに慣れるわ、マルカ……」

「……あう、マル、カ……？」



「ふふっ、女の子にマルクって名前はおかしいでしょう？  
せつかく生まれ変わったんだから、  
名前も女の子らしくしなくちゃ」



「あ……………」

「フフ……おはよう、マルカ。  
お洋服は貴方が眠っている間、私が着せてあげたの。  
とっても似合っていて、可愛らしいわよ♪」

「かわ、いい……？」

ドクン――。

鏡を見せられて、胸が高鳴る。  
これが自分――奇妙な喜びを感じる。  
かつての記憶はあって、ママを助けるために  
戦ったことも憶えているのに、  
まるで前世のことのように、遠く感じる。

「気に入ってくれたようね。  
さあ、おつきしたところでまずはお食事。  
体は大きくてもまだ赤ちゃんなんだから、  
おっぱい沢山飲まなくちゃ」



「ああ……ママのおっぱいいい……♡  
ちゅぱちゅぱちゅぱ……ああむ……」

しゃぶるのが自然なことのように、  
顎の力が抜けた。  
口の中に乳首を含み、吸う。  
じわあつと滲み出てきたミルクの甘みが、  
自分の存在への漠とした不安を、  
ほどこさせてくれる。

「くすっ、偉いわ。ちゃんと飲めるのね。  
好きなだけ吸っていいのよ。  
フッフ……このおっぱいは貴方と魔王様だけのものだから♪」



(……魔王、さま……—？ 私は、魔王……倒しに……)

「あらあ？ まだ男の子の心が残っているのかしら？  
ダメよ、つまらない考えは捨てて、  
ママと一緒に魔王様にお仕えするの。  
それが牝になったマルカの幸せなんだから」

(牝……幸せ……)

「むちゅっ、ちゅうう……んっ、んくう……♡」

有無を言わず、乳房が押し付けられる。  
水風船のように張りがあって、柔らかく、温かい。  
そして味蕾に伝わるトロけるような甘さが、  
思考にモヤをかけていく。





「……んくっ、んくうっ、ちゅっちゅ……っ♪」

口腔に溜まったミルクを嚥下する。  
温かなミルクが食道を下っていく瞬間、  
顔中の筋肉が緩むほどうっとりする。

「クスクス……魔女の母乳をこんなに夢中で飲んで♪  
そうよね、もうとつくに元には戻れない。  
このままママの娘として、  
魔王様の牝になるよう育て直してあげるわ、マルカ」

「ちゅるう……ちゅっちゅ……ふああ……っ。  
ママのおっぱい美味しいよお……っ♡」





「……ふあつ、けぷ——っ」

授乳を終えると、マル力は小さなげっぷをした。  
さつきまでの戸惑いは消え、ママに甘えていいんだ、  
という安堵が心身を満たしている。

——不意に、マルシエラが顔をしかめた。

「——あらまあ。嫌ね、空気の読めない人間たち……」

「ママ……?」

「ごめんね、ママ。行くところができちゃった。  
戻ってくるまで、お留守番してられる?」

「お留守番? いやあ、ママ、行かないでえ」

「ごめんね、すぐ片付けて戻ってくるから、いい子にしてて。  
ほら、ママのおっぱいの代わりにいいモノをあげるわ」

「いいモノ……?」







「ふふっ、ほおら、おしゃぶりよ。  
貴方のためにこしらえた特別製。  
見てほら、おちんちんのカタチしてるの、いいでしょう」

「あ……ああつ、おちんちん……ごくっ」

狂っている……辛うじて、そう思える感覚はあった。  
けれどここでは常識やモラルなど意味はなく、  
マルカは言いようのない興奮を覚えてしまっている。

「ほら、あーんして。おちんぽしゃぶらせてあげる」

「んあ……あへあ……ふあ……はああ……♡」



「んちゅっ、ああむ、んむ……ンン……」

「ふふっ、上手におしゃぶりができたわね。  
その内、本物ちゃんぽを啜えさせてあげるから、  
それまでそれで練習するといいわ」

「んじゅるる……じゅるる……むふー、むふふうンン……♡」

ペニスおしゃぶりを啜えたまま、頬が勝手ににやける。  
もごもごと無意識に口の中を動かし、肉棒を扱くように  
舌や口蓋を使う。

「そうよ、お上手♪  
その調子で、そのおしゃぶりを魔王様のおちんぽだと思って、  
大切に扱いなさい」

「ぢゅるるっ、じゅぷっ、じゅぷっ、じゅぷぷ……っ」  
(んふううンン……魔王、さま……?)





——ドクンッ

おぼろげな記憶が蘇る。  
温かな母の胎内。そこで感じた、圧倒的な牡の存在。  
淫母との繋がりで伝わってきた法悦は、  
マルカの魂にあまりに大きな影響を及ぼしていた。

そして——。





ぞくう——！ びくっ、ぶるる……っ。

「ほおおお——ッ♡

んじゅずっ、じゅるるっ、じゅぶぶ……っー」

「まあっ、この子ったらおしゃぶりで感じてるの？  
まあまあ♪ なんて可愛いのかしら♪」

「んちゅっ、じゅるぶぶっ、じゅるるっ、じゅるるる——っー」

「ふふっ、マン汁みたいな涎で、お顔がベトベトね。  
涎掛けしておいてよかったわ。  
まあ、この分ならお留守番も心配なさそう。  
……それじゃママ、マルカがおしゃぶりフェラに  
夢中になっている間に用事を済ませてくるわね」

「じゅるる……っ、じゅっぶじゅっぶ……んくううん……っー！  
(マ、ママ……イっちゃう。ああっ、だめえ——！)





ママが去っていく。その後ろ姿を見送りながら、  
マルカはフェラアクメに溺れ、アへ顔を晒していた。

「んっ、んおお……ッ、ほおおお……ッッ♡♡」  
「イ……くううう——!!」





置いていかれたマル力は、  
そのまましばらくの時間、夢見心地で過ごした。  
本物のちんぽは、どんなだろう？  
夢想しながら、変わってしまった自分のカラダをまさぐる。  
ママに置いていかれた寂しさを紛らわすように、  
何度も何度も自慰に耽った。

そうしてどれくらいの時間が経っただろうか。





どうやらいつの間にか、眠ってしまったようだ。  
目覚めると、さっきより少しだけ意識がはっきりしている。

「もご……むちゅ、にちゅ……」

(ママ……いない。そうだ、用があるからって、留守番……)

「じゅる……れろっ、ちゅちゅ……っ」

(……そういえば、拘束されていない。  
体も動くし、逃げようと思えば、いつでも逃げ出せるわ……)

「ちゅっっっ、じゅるっ、じゅぷぷ……♡」

(……でも、魔王様のところから逃げ出してどこへ行くの？  
今の私に、ここその他に行くところなんて……)





「じゅぷぷ……っ!」

(……ああ、いま私、無意識に魔王様って……。あの方にもう負けたつもりでいる。私が諦めたら、大勢の人が犠牲になって、戦火が世界を包むのに……っ)

「じゅぷぷっ、じゅるるう……っ!」

(私にまだちょっとでも勇者の資格が残っているなら、敵わないと分かっているけど、立ち向かうべきじゃないの?)

「じゅるるん——!」

(そうよ、今なら城も手薄——!)

「フフン、よからぬことを考えておるな、マルク……いや、今はマルクだったか」





「……もがちゅっ、んんうッ!?」  
(その声、ま、魔王様!)

「ククク……貴様をそのまま置いてゆくと、は、母親ゆえの甘さかな? しかしマルカよ、その母が今、どうしているか知っているのか?」

「じゅるる……んふうふう……?」

どこからともなく響く魔王の声。その重厚な響きに、胸が高鳴る。奮い立たせようとしていた闘志が、急速に萎えていくのを感じる。

「——見よ、マルカ。これは今この時、魔王城付近の草原を映し出した映像だ」



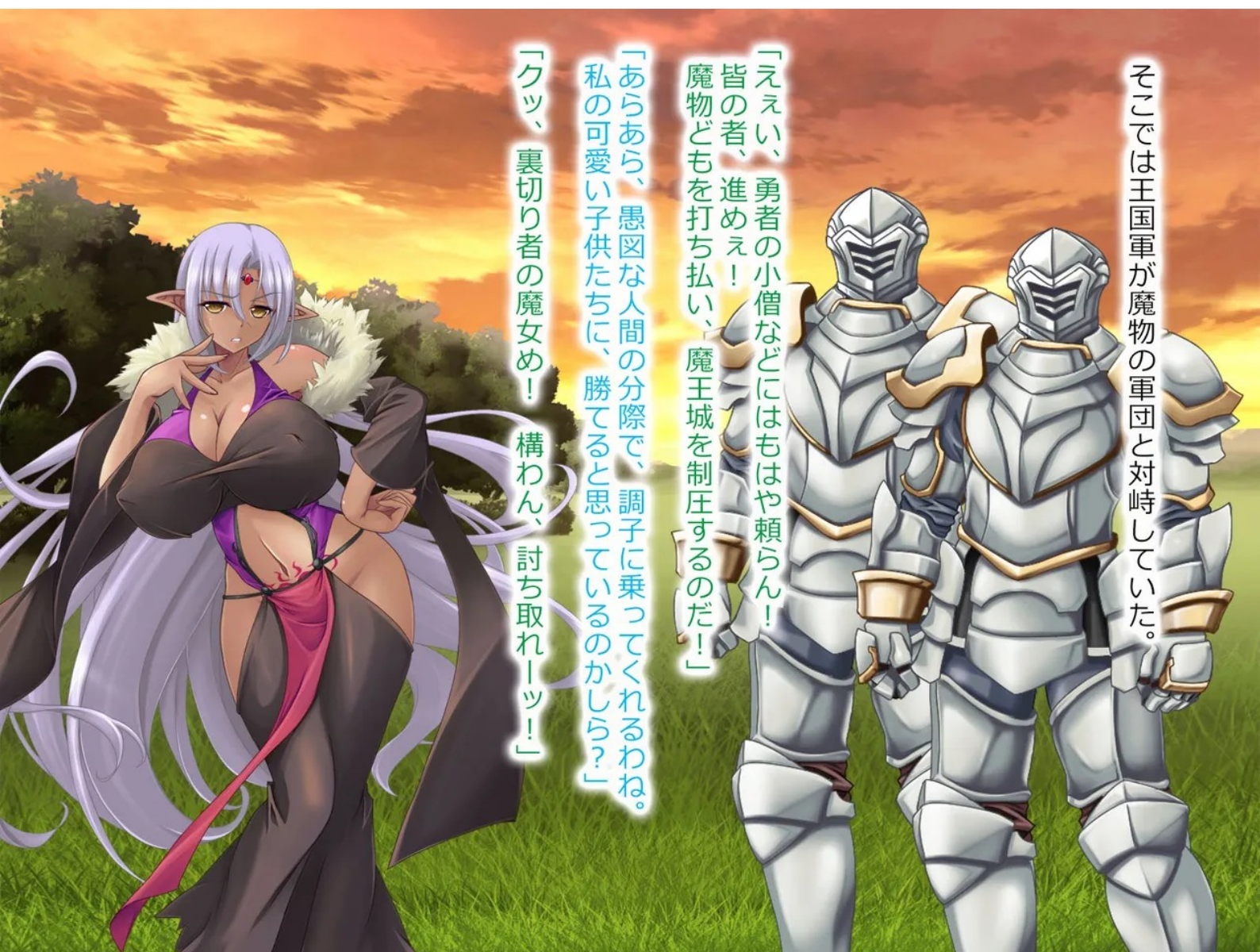


そこでは王国軍が魔物の軍団と対峙していた。

「ええい、勇者の小僧などにはもはや頼らん！  
皆の者、進めえ！  
魔物どもを打ち払い、魔王城を制圧するのだ！」

「あらあら、愚図な人間の分際で、調子に乗ってくれるわね。  
私の可愛い子供たちに、勝てると思っているのかしら？」

「クッ、裏切り者の魔女め！ 構わん、討ち取れーッ！」





(こ、これは……！)

おしやぶりを啜えたまま、マル力はわなわなと震える。

「見ての通りだ。人間どもが攻め寄せてきている。貴様が四天王を片付けてくれたおかげで、我が手勢は不足しているからな。マルシエラが孤軍奮闘しているが、思ったより苦戦しているようだ」

(あ、ああ……っ)

「フン……それでどうする？」

貴様は自由だ。このまま我に挑むか？  
王国軍に加勢して、魔物と戦うか？ それとも――」

(……！ わ、私……私は……！)





「「ウオオオオオオ」

ツツ!!」」

王国軍が喚声を上げて、マルシエラに迫る。個々の力量の差を、彼らは数の有利で覆っていた。行く手を阻んだ触手の魔物を、槍ぶすまで滅多刺しにした後、兵士たちはマルシエラを仕留めようと包囲を狭める。

「もらったあ！  
「おおおーッ！」

魔女を串刺しにしろ！」





「させないッ！ はああ——っ!!」

シュパァッ！ ギィィン——ッ！

目にも止まらぬ剣閃が、  
マルシエラに群がっていた兵達をまとめて屠り去る！

「な、なんだっ!?」  
「ぐうああああああ——ッ!?」

「ママ、無事!？」

「あつ、貴方は……!」





「まあ、マルカ。来てくれたのね！  
留守番してなさいって言ったのに……」

「ごめんなさい、でも魔王様が背中を押してくれたの」

「まあ、そうだったの。

なんて器の大きい御方なのかしら。  
魔王様のためにも、さっさとこのお邪魔虫たちを  
片付けないといけないわね」

「うん、それで二人で帰ろう、ママ！」

「大丈夫？ 戦えるの？」





「任せて。このカラダ、  
闇の波動がグングン湧いてくるの。  
それって、ママと魔王様が  
魔精をたくさん注いでくれたからでしょ？  
だからこの力で、魔王様の敵を皆殺しにするのが、  
私の役目なの！」

「くすっ、頼もしいわね。  
それじゃあ、お手並み拝見しましょうか」

「ふふっ！ さあ、行くよッ！  
**ダークライト・セイバー!!!**」





「うぐッ、ぎゃあああああ——ッ!?」  
「ひっ、ひい……ッ、なんだコイツ、強すぎる——ッ!」

闇の流星が、王国軍の兵達をまとめて消滅させる。  
マル力たった一人によって、彼らは算を乱し、  
総崩れになっていた。



「ば、バカな。魔王軍にまだこんなヤツが  
残っていたなんて、き、聞いてないぞ……。  
おのれ、勇者の小僧め……  
ヤツがしくじったせいで……こんな、目に……ぐふッ」



「……」  
かつて盟友と思っていた王国軍の将に、  
マルカは剣を突き立てトドメを刺す。  
その顔には何の感情も浮かんでいなかった。

「くすっ、大活躍だったわね、マルカ。  
人間たちの殲滅……魔王様もきつとお喜びになるわ」

「でも怒ってないかな。  
愚かにも勇者として、あの方に挑んだこと……」

「大丈夫よ。ママが取りなしてあげる。  
ふふっ、ママに考えがあるの」







そして、城に帰還した母娘は魔王ジルレティと謁見。  
母マルシェラの発案で、マルカは魔王への屈服を示し、  
牝奴隷剣士としてお仕えすることを誓う、  
ひとつの儀式を行うことになった。

「さっ、できるわね、マルカ」  
「うん……ドキドキするね、ママあ……」



「いい眺めだ。母自ら娘の処女膣を広げてみせるとは。  
ククク……フハハハハ——！」

「過去の反省と魔王様への  
忠誠を籠めて、  
生まれ変わったカラダの  
処女をお捧げする。  
それがこの娘の望みですわ。  
——ね、マルカ♪」

「は、はい……魔王様、  
どうかマルカの処女を  
いただいてください」

「あら、この娘ったら  
緊張してるの？  
体が震えているわよ」

「クク……人間を殺戮するより、  
今の方が大事と見えるな。  
おい、マルシエラ、  
少しほぐしてやれ」

「まあ。なんてお優しい心遣い。  
分かりましたわ。それでは失礼して……」





「んはあ……ちゅっ♡」

めくれて覗く  
サーモンピンクの器官に、  
マルシエラは口付けする。  
娘への親愛を表すキスは、  
すぐに淫靡なクンニになって、  
その性感を引き出す。

「ちゅるう……れろお、  
んちゅ……れちゅ……  
にちゅちゅ……っ」

「ああ……あん、ママ……  
ああ、そんなところお……  
舐めちゃ……ふあっ、  
ああん……っ」

「ほら、もうジュースがこんなに♪  
マルカのここ、すっごくいやらしわ。  
くすくす……っ」





優しく、それでいてねちっこく、  
淫母の舌が肉ビラを舐め回す。  
その鼻先に股間を押し付けるように、  
マルカはヒクンヒクンと腰を浮かせる。

「あつ、ああん、そこはあ……ッ」

舌先がクリトリスを見つけた。  
包皮の上からこじるように  
刺激を送り、オーガズムを  
催させる。

「んふふっ、マルカの弱いトコ。  
おちんちんだったお豆を  
震わせてイっちゃいなさい。  
ちゅっ、ぐりゅ——ッ♡」

「はああン、あはああ——っ!」







「ああんっ！  
ママっ、イってる！  
体が宙に浮かぶみたい……  
はああ〜っ！」

「あはっ、とっても  
感じやすいのね♪  
マルカのクリちゃんぽは  
潮噴きスイッチね♪」

「うん、うんっ、すごいよお。  
見て、ママ！ 魔王様！  
私のイってるところ見てくださいーっ！」



「魔王様、ご覧の通りマルカの緊張もほぐれたようですわ」

「フン、潮まで噴かせておいて、よく言う。貴様自身、興奮しているのが丸分かりだぞ」

「恐縮にございます。」

ですがマルカの処女膣もすっかり潤って、魔王様のデカマラを迎え入れる準備も整っていると存じますわ」

「クク……いいだろう。では始めさせてもらおうか」

キーン……♡……ん……っ

マルカの割れ目に亀頭が宛がわれる。牡の威容に反応してか、肉ビラがひとりでにヒクつき、愛液があふれ出る。

「はあはあ……魔王様のおちんぼ……おつきい。比べ物にならない……」

「フン、どれと比べているのだ？ かつての小僧の粗チンなど、比較すること自体、非礼にあたるぞ」



「あ……♡ 本当にその通りです。私、身の程を思い知りました。こんな立派なおちゃんぽを持つ魔王様に歯向かうなんて、どうしようもなく愚かでした」

「マルカ……それが分かったから、こうしているんでしょう？ ほら、魔王様にすべてを差し出さないさい」

淫母が両手指で、花弁を割り開く。  
くばあ——と、  
これでもかと開帳させて、  
主人の亀頭を導く。

「さあ、魔王様……いつでも」  
「ああ、来て、くださいー！！」







ぶちっつ むんんんんん——！！

「……ッ、はああああ——っっ!!」



デカマラが、一息に根元まで収まる。  
その衝撃に、頭の中が真っ白になる。  
母の胎にいた時から、夢にまで見た処女喪失。  
変節、屈服、生まれ変わり……。  
その体験はもう経ていたはずなのに、  
本当の意味で魔王のモノになった実感が、  
マルカの心と体を満たしていく。

「ふあああーっ！」

魔王様のおちんぼがナカに……  
す、すごい……ギチギチに詰まって、  
突き上げてくる……  
ひっ、ひぐうう……っ！」

「クク、これが勇者まんこか。

いや、今はもう私の  
専用牝腔であつたな。

キツいくせに吸いつきの  
強さは母譲りか。  
好きモノのまんこだな」

「おおっ、ま、魔王さまあ……っ」

「フン、いつまで呆けている！」





「んぎいんっ、ま、魔王様っ、魔王様あッ！  
ああっ、おちんぼがナカをぐちゃぐちゃにかき回すのッ！  
痛いのと気持ちイイのが弾けるのおーッ!?」

グチュッ！  
ずちゅっ！

ぱちゅんっ！

ぱんっ！ぱんっ！  
どちゅんッ！

激しい肉弾に、膣ヒダが悲鳴を上げる。  
苦痛と快樂がない交ぜになって、  
狂おしさに牝の狂態を演じる。

「ああ、なんて素敵なおまんこ……！  
目の前でマルカのおまんこが  
魔王様のカタチに拡張されているわ！  
こんなのッ、こんなものを  
見せられたら私……っ」



「んれろおおんっ！  
れろッ！ れろッ！ れろッ！  
じゅるるるう——っ！」

「……ッ!? ママ、そ、そこ……ッ  
あひいいん——ッ!?」

マルシエラの舌が伸び、結合部に触れる。  
ざらついた味蕾の感触がクリトリスをさらい、  
肉ピラとマラの間に潜り込んで、絡みつく。

「くおおっ、いいぞ！  
そのまま続けろ、マルシエラ！」

「ぢゅっぷう、れりゅじゅるじゅるるう——っ、  
ずるるうん——♡♡♡」





ピストンに息を合わせるように、マルシエラの舌が躍る。  
魔王の裏スジを舐め、マルカの花弁をねぶり、  
セックスの快感にブーストをかけていく！

「あああつ、魔王様おちんぽと  
ママの舌が当たって……ッ、  
す、すごすぎるう——♡

こんなの無理イ——ッ！  
イクッ、イクッ！  
おっほおおおおお……♡♡  
クリでイクッ、  
おまんこイクッ、  
全部イク……ッ!?」

ぎゅううう——ッ！  
アクメ膣がデカマラにしがみつく！  
求愛の締め付けが、射精を促す……!!

「……ッ、うおおおお——っ!?」



どくどく、どくどく……  
びゅるるるるるるるるるる……!!

「ああああアアア——ッッ!!」

深く繋がったまま、射精が始まる。  
膣から子宮へマージングするように、  
魔王ちゃんぽが激しく脈動して、  
大量中出しをキめる。

「おほおおッ♡♡♡ 出てる……ナカにドクドク……ッッ!  
魔王様のザーメンで子宮パンパンになるうう——ッ!!」





「まああ……！ マルカったら、イキながらおまんこでゴクゴク精子飲んでるわ！ マルカのイキ顔、なんて素敵なお……！」

「クハハッ、まだ出るぞ！ 残らず注ぎ込んでくれるッ！」

ドクンッ

ズビュルル——ッ！

「おっひひひひひん——ッ♡♡♡♡」

射精しながら、魔王が腰を揺する。アクメがまた一段押し上げられ、マルカはアへ顔を晒したままめくるめく法悦に蕩けていく。

「ふあああつ、魔王様あ♡♡  
あ、愛してます……っ！  
ずっとずっと……ああッ、  
さ、最高れしゅっっ！」





ずばおおお……っ！

「んっ、……ほおおん——♡」

射精を終え、ゆっくりと肉棒が引かれた。くばあつと拡張されたままの割れ目から、湯気と共に、大量の精液が溢れだしてくる。

「はあ、はあ、はあ……  
ああ、おちんぼ抜かれちゃった……  
せつかく出していただいたのに、  
精子こぼれちゃうのお」

「フッフ……大丈夫よ。  
これからはもつともつと、  
たくさん出していただけるわ♪」





淫母の手が、子宮をお腹の上から撫でる。  
魔王に愛され、熱く火照ったそこは、  
注がれた精があまりに大量なゆえに、  
ぽこつと膨らんでしまっているようだ。

「あはあ♪ ほら、マルカの子宮、  
魔王様の精子で溺れちゃっているわよ♪」

「ふああつ、ホントお……  
ぽかぽかして、嬉しい……♡  
幸せなお……っ」

——ぞくっ、ぞくぞく……っ

「あッ♡ あんっ、  
何もされてないのに……っ♡」

忠誠と感謝から、またアクメが込み上げる。  
そんなマルカを、マルシエラと魔王が見下ろしていた。





それから――。

戦力を整えた魔王シルレティは、  
マグリナの地と王国に、二次侵攻を始めた。

闇の勇者マルカと魔女マルシエラを加えた魔王軍に、  
王国は為す術もなく蹂躪されていく。





「うわあぁつ、ヒィィイツ、魔王の女どもが来るぞッ！」  
「お、おいッ、逃げるな、迎撃を——」

ザシユッ

ズバッ ズババ——ッ！

「ぎゃあああああ——ッ!?」

浮足立つ王国兵を撫で切りにして、マルカは悠々と進む。  
逃げようとした者は魔女マルシエラの魔法で、  
残らず氷の彫像にされている。





「あーあ、歯ごたえがなくて物足りないな。  
こんな人達を守るために勇者やってたなんて、  
過去の私はなんてバカだったのかしら」

「ええ、私も反省しているわ。  
この国は最初から魔王様が支配するのが  
ふさわしかったのに、それに気付かないで  
邪魔なんかにして……。  
せめてもの償いに、私達でキレイにお掃除しましょうね」

「うん、ママ。魔王様のためなら退屈なんて言わない。  
丁寧に丁寧に蹂躪するんだから！」

「返り血を浴びて、魔に堕ちた母娘が悠々と進む。  
二人と魔王軍の勢いを止められる者はもはやなく、  
王国が陥落するまでにさしたる時間はかからなかった。」







「うははははは！  
ついに、ついにこの地を我がモノとできた！  
いい働きであつたぞ、お前達。  
かつての四天王など及びもつかない活躍であつた！」

「ああつ、お褒めに与り光栄ですわ、魔王様」

「魔王様のお役に立つことが、私達の喜びです！  
そのためなら何だってします！」





「うむ、いい心掛けだな。  
では褒美と祝いを兼ねて、  
お前達を同時に抱いてやろうか」

「まあ、本当ですか♪」

「ああ、想像しただけで嬉しくて震えてくるよお……!!」

「フン、本当は期待して、

さつきから股座を濡らしていたのだろう?  
我の気が変わらぬうちに支度をするのだな」

「はい、ただいま♥」 「可愛がつてください、魔王さまあ♪」



「えへへっ、どうですかあ？  
ママとツーショットスタイルでーす♪」

「ほほう、これはいい眺めだ。  
貴様らの父であり、夫であった男が見たらどう思うか、  
考えただけで笑いが込み上げてくるな」

「あん、あんな人どうでもいいんです。  
それより早くっ、おまんこしてほしいですわ♥」

「私もお、待ちきれなくて、子宮がウズウズしてるんです♥」  
「クク……まあそう焦るな。ならばまず挨拶をしてもらおう」





「あつ♪ 触手が……♡」

触手から立ち昇る牡の性臭に、母娘の鼻腔がヒクつく。  
頬は自然に緩み、先走り汁の滴る亀頭に舌が伸びた。

「くすっ、この触手にご挨拶すればよろしいのですね？」

「ママ……私がやるよ。ペロペロ啜るう」

「いいえ、まずは私が作法を見せます。  
マルカはよく見ておくように」

「ああん、ママあゝ」

ぺろっ  
ぷちゅっ

じゅる  
れろお  
ちゅぷあ♡





「あもお〜〜ぶちゅッ♡  
ぢゅるるんんっ、ぢゅっ、ぢゅう……ッ♡」

「あはっ、ママ、すごいっ。  
あんなに奥まで頬張って、顔中おまんこみたい。  
とっても美味しそう……♪」

「じゅるるっ、ずぼっ、ちゅぼっ、ぼるんっ、じゅぼぼっ！」  
（見なさい、マルカ。これが本気フェラよ。  
喉の奥まで受け入れて、肉壺になりきるの……っ）

娘の前で、誇るように頭部を上下させ、ディープスロート。  
ぼちゅっ、じゅぼぼっ、と下品な水音を奏で、喉を鳴らす。  
相応の苦しさがあるはずだが、マルシエラの表情には法悦だけがある。

「おおっ、んほおお……っ♡♡♡」





「——ぷはぁ♪ んふう……どお？  
さ、今度はマルカの番よ。  
しゃぶらせていただいている感謝を忘れずに、  
喉までおまんこになりきりなさい」

「う、うん。分かった。やってみるね、ママ。んちゅ……♪」

母からバトンを渡されたマルカは、  
改めて舌先で触手をねぶる。  
マルシェラの唾液がこびりついた触手に、  
下腹部がきゅんきゅん疼くのを感じる。

「じゃあ、いくね……？ あ~~~~」





「ん……っ、ぶふう……ッ!」

啜えた途端、触手が粘塊を吐き出した。  
濃く粘り気のあるエキスが喉に絡み、  
マル力は思わずむせそうになる。

「ぶちゅ……ッ!  
れりゅっ、じゅるるっ!  
んじゅ……っ!」

「大丈夫、苦しくてもそれが良くなってくるから。  
口の中全部、素敵な味と臭いで、  
うっとりしてくるでしょう?  
頑張っ、そのまま吸いついて?  
それがお口まんこの作法よ」









どぶんと、どぶぶぶぶぶぶ——ッ!

「んッ!? むふうん~~~~ッ!?」

触手がビクビクと脈打つ!  
凄まじい勢いでザーメンが吐き出され、  
マルカの口腔に流れ込んでいく!

「ああっ、美味しい? 美味しいわね!?  
ママがちゃんと射精しやすいよう、加減しておいたからっ、  
ザーメンミルクたっぷり味わいなさい♥」

「んくっ、んくっ、  
んぶぶ……ッ、  
んふううう——っ!」

——ぞくっ、ぶるる……っ

食道から胃に伝わる精の熱さ、臭い、そして重さに、  
マルカは身震いする。  
精飲アクメに身を委ね、淫紋の刻まれた子宮が  
勝手に蜜を吐き出す。

「んおおっ、おおっ、ほおおお……っ♥♥」



「ふうっふうっ あふう はああ……っ♡」

「クスッ、ちゃんと最後までごっくんできたわね、偉いわよマルカ」

「うん……だってこんなにも美味しいんだもの。私、イキながら夢中で飲んじやった」

「……ねえ私、ちゃんとお口まんこの作法できたかな？」

「もちろんよ。だから触手おちんぽも、こんなにザーメン飲ませてくれたんでしょう？」

「うん、ありがとう……ねえ、ママ」  
「ん、なあに？」





「お返しい……♪ ちゅっ、れろお——」

「ふうん……ちゅりゅ……れらあ♪」

娘のキスに、マルカは即座に動きを合わせた。  
唇をついばみ、舌を絡め、残った精を舐め取る。

「えへへ、ママにもザーメンミルクお裾分けだよ♪」

「まあ、マルカったら……じゅるっ、レロレロレロ——」

「んっはああ……しゅごい……ママのキス、力抜けちゃうよお」





娘の口腔に残った精を、マルシエラは啜る。  
牝犬のように貪欲な舌遣いで、精飲できなかった  
ムラムラを少しでも晴らすように――

「ちゅっちゅっ、ちゅっちゅっ、  
じゅろおっ、ぢゅぷふう――」

「ふああ……お口まんこ、  
クンニされてるみたいだよお」

――ぞくぞく……っ。

「ああんっ、ふうっ、ちゅ……んんんっ！」

牝母のフェロモンでザーメン臭を上書きされ、  
新たな劣情が募る。  
結局、マルカはキスでも軽く達してしまった。





「ククク……、ただの挨拶でサカリおつて。  
だが宴もたけなわのようだな」

「あはっ、魔王様！」

「はい♡ もう体中発情して、どうにかなってしまいそうですわ」

「触手の体液には媚薬成分があるからな。  
よかろう、母娘ともに可愛がってやろう」

「ああッ、すごい……！」

「その言葉だけで昇天しそうです……ッ」

「ふっ、焦らずともイキ狂わせてやる。さあ、股を広げてみせろ」





「はあっ、はあっ♪」「早く、早くう！」

「フフン、母娘揃って媚びおつて。この我に齒向った記憶を、なくしたわけではあるまい。かつての己に恥ずかしいとは思わないのか？」

「いいえ、恥ずかしいのは、むしろ過去の自分に対してですわ。魔王様の偉大さも知らず、あんな愚行を……」

「うん、本当に生まれ変わってよかった。くだらない勇者の使命のせいで、こんなに気持ちよくて幸せなことも知らなかったんだもん」

「ククっ、そうか。勇者などくだらない。我が与える快樂こそ至高。そう言うのだな？」





「はいっ、もちろんです、魔王さまあ♡」

「ふはははっ、ならばその快楽をくれてやろう！  
光栄に思うのだな！」

——ズンッ　ズブチュ……ッ！

魔王のデカマラが、マルカの膣を抉る。  
まだ未熟な花弁をメリメリと割り開き、  
一挙に奥まで結合する！

「んっはあ！　魔王様のおちんぽ……ッ！  
マルカのちびマンコ拡げて、奥を抉ってくりゅッ！  
ああっ、はあああ……ッ！」





「貴様の膣も中々だぞ！ フハハ、褒めてつかわす！」

「うふふ、私が愛情持つて産み直しましたもの。存分にご賞味くださいませ♡」

「あつ、ありがとう、ママあ！」

魔王様にふさわしいおまんこにしてもらえてッ、

ああ、嬉しいよお！

おちんぼでゴリゴリ削られてるのにッ、

おまんこ馴染むのッ！ キュンキュンなびくのおーッ」

もうマルカはアクメしっぱなし。

男だった頃の自分の性器とは次元の違う、

魔王のデカマラを出し入れされる度、

屈服の悦びが込み上げる。

それは牡の名残り。

自分よりあらゆる面で勝った相手に蹂躪させられる、恍惚のマゾヒズム。





「そろっ、いいマンコを産んだ褒美だ、マルシエラ！」

ズボツ!! ボリユリユリユリユ~~~~ツツ!!

「んっほおおオオ——ツツ♥♥♥♥」

通常ではありえない音を立て、  
触手が膣に潜り込む。  
割れ目をめいっばい拡げ、  
イボを擦りつけ、  
先を争って肉襞を貪る。  
その刺激に、マルシエラは  
カラダごと波打つ!

「おおっ、ンオオツ!  
しゅごいしゅごいしゅごいれすうらう  
おまんこ限界までくばあってされながら、  
同時に子宮はむはむされりゅ——ツ!?」

ツ♥♥♥



「くははッ、さすが勇者のメスガキをヒリ出した牝穴だな！  
並の女なら発狂するところを、よがりまくっておるわ！」

「ひいーっ!? 魔王様の触手ッ、最高ですわあ——ッ！」

「あぁっ、ママ、すごい……っ。  
私もっ、私も魔王様に悦んでいただけよう、  
もっとおまんこするのぉッ！」

互いの痴態に刺激され、母娘が昂る。  
その姿を主君たる魔王に誇らかに  
見せつけ、乱れ悶える——！

「ふおおっ、イグッ、すぐイグッ!!  
イぎまずうう~~~~ッ!?」

「んおおおおッ!  
マルカもッ、アクメ来ます——ッ♡♡」





ツツ♡♡

牝獣さながらの声で、母娘がイキ狂った。並の女なら壊されてしまうほどの責めでも、二人には最高の快楽……！

激しい肉弾に、彼女達は全身を痙攣させて悦

グチユグチユ！ パンパンパンパン——！！

「いぎいッ、ひぐっ、ほおっおっおほおお——ッ!!」

「んひいいいッ、イキっぱなしッ！  
イキマンコ、魔王様おちんぽが叩いてくりゅッッ！  
しゅ、しゅごすぎりゅ——っ!？」



「おほおおお——っ！ おおっ、おほオオツ！  
おまんこほじくり出されちゃうッ！  
ナ力で暴れて……もおどうなってるか分からないイイツ！  
最高お、ただずっと最高ですう——！！」

「オオツ♡」

「んひっ♡」

「アヒッ♡」

「んオオオ——♡」

「おちんぼ子宮グリグリしてえッ！  
孕みたがって奥がキスしてるう！  
あひい……ひいひいッ！  
ビリビリ、ずっと……イってるう——ッ!?」





「おっ おっ おっ おお……ッ!!  
マルカツ、マルカあーッ!」

「ひぎいんんんッ

あーッ! あーッ!  
ママああーッ!」

「ああああ——ッッ!?

魔王様 愛していますぅぅ ♡♡♡♡」

「ああああ——ッッ!?

魔王様 愛していますぅぅ ♡♡♡♡」







—どくんっ

「……ひひひ……ッッ、おお  
ッッ♡♡♡」



触手と魔王ちんぽの同時射精——  
アクメのさらにその上のアクメに、  
母娘は声もなく感じ入る。

膣内はきゅうきゅうと  
ちんぽや触手に吸いつき、  
ザーメン汁をガブ飲みし、  
そしてまた絶頂を新たに……！

「おおおお……っ、ほおおんん……っ、  
あひっ、いひい……っ♡」

「……ま……ま……まおー、しゃまああ……っ♡」

「クク……フッフツ、素晴らしい……！  
貴様ら親子が、アへ顔を晒して  
私の精子を受け入れているとはな！  
ついでだ、体の内も外もザーメン漬けになるがいい！」





魔王の合図で、さらに別の触手が母娘に群がった。  
二人を包囲し、その矛先を口ツクオン――。

「あへああ……えあ……あうあ……っ」  
「ほおお……あへ……えああうう……っ」

未だアクメに溺れ、忘我の淵にいる母娘は、状況を認識できてない。  
だが牝の本能によるものか、  
触手の精臭を感じ取った体が小刻みに震えた。  
この直後に訪れるであろう破滅的エクスタシーの予感に、  
子宮が疼いている。

そして――！

「イキ狂え、牝ども」







どばっ！ ぼびゅるっ！

ぶびゅぶぶぶぶぶ——っ！！

「~~~~~ッッ!？」

んっはあああああ——『!？」

「おおおおおおオオオ——♡♡♡」



触手の一斉射精……さながら精液のシャワー。  
熱く、噓せるような激流を浴びせられ、母娘がのたうつ。  
ぶっかけでもアクメを催し、  
無様なアへ顔をもっと無様に彩っていく。

(ああああッ、精液に染められ、洗い流されて……ッ)

(魔王様の性処理ワイフ……もうそれだけッ。  
昔のことなんてもう微塵も思い出せない……ッ！)

「あはああつ、心もカラダも、  
魂まで魔王様に隷属するの……ッ」

「マルカと一緒に……  
ありがとうございますッ、魔王様あーッ！」





「はあっ、はあっ、あああゝ♡んふうう——」  
「ふああ……もお体、力入らない……よお……あああ……♡」

びくん ぶるる……っ

余韻に浸る女体が、くっつきあったまま震える。  
ザーメン溜まりの中で溶け合い、心はひとつ。  
魔王への親愛と忠誠と情欲に、  
魂までどっぷり染まっている。

「クク……これから先も働いてもらうぞ、マルカ、マルシエラ」

「ああ、もちろんですわ。」

魔王様のためなら、どんな所業も喜んで」

「だからまた、いつでもおまんこしてください、魔王様あ」





「ふっ、いいだろう。  
これからも親子睦まじく、そして淫らに我に仕えるのだな」

「ああっ♡ なんて素敵……っ」

「ママあ、嬉しくてフワフワして、またイっちゃうよお♡」

「んっはあああ!」 「あううう……っ!」

——ぞくっ びくん……っ

嬉しさと忠誠心から、またアクメが込み上げる。  
窒息しそうなザーメン臭の中、  
母娘はいつまでも幸福にまどろんでいた。





この後――。

魔王ジルレティは、豊穣の地マグリナを拠点に、大陸全土へ侵略を拡げていく。

霸道を進める魔王の傍らには、妖艶なる魔女と、妖美なる魔剣士が常に付き従っていたという。





「ねえマルカ。幸せ？」

「うん、とつても！  
ママと一緒に魔王様にお仕えできて、  
こんなに嬉しいことないよ。  
これから魔王様の敵を、いっぱいいっぱいお掃除しようね！」

「くすつ、ええ、そうね。」

もう勇者の使命なんかで貴方を犠牲にすることはないわ。  
そうなるのは、魔王様に逆らう愚か者だけだもの」

「大好きだよ、ママ♪ 今度は一緒に孕ませてもらって、  
魔王様の赤ちゃん産みたいな」

「まあ、素敵ね♪  
今度の国を陥としたら、魔王様におねだりしてみましよう」

~THE END~

















































































